

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第35集

はる つじ
原の辻遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

2020

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第35集

はる つじ
原の辻 遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書





カラー写真1 2018年度調査区遠景（内海湾を望む）



カラー写真2 2018年度調査区遠景（丘陵部を望む）



カラー写真3 2018年度調査区



カラー写真4 基本層序（3b区西壁）



カラー写真5 2a区1号溝（北から）



カラー写真6 2b区2号溝（北から）



カラー写真7 4a区3号溝（北から）



カラー写真8 3a区掘削跡（東から）



カラー写真9 3b区鉤手状掘削跡（北から）



カラー写真10 1a・1b区石列遺構と畦畔状遺構（南西から）



カラー写真11 1a 区石列遺構（南東から）



カラー写真12 1b 区畦畔状遺構（南西から）

発刊にあたって

本書は、国庫補助を受けて実施した、平成30年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は、これまでの調査で、多重の環濠や日本最古の船着き場跡などが確認されるとともに、中国や朝鮮半島との盛んな交流を物語る数多くの遺物が出土していることから、中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支國」の國邑と特定されました。 「魏志倭人伝」の中には30余りの国の名前が記されていますが、国邑が特定されたのは原の辻遺跡だけで、当時の国の規模や構造を解明できる非常に学術的な価値の高い遺跡とされ、平成12年11月には弥生時代の集落遺跡としては全国で3例目の特別史跡として指定を受けました。また、昭和49年以降の発掘調査で出土した原の辻遺跡の遺物の中で、遺構や場所が明確で遺跡の時代や対外交流の歴史を裏付けることができる資料1,670点が、平成25年6月19日に重要文化財に指定されました。

平成30年度の範囲確認調査は、壱岐市芦辺町芦辺平触で実施しました。環濠の外側に該当する地区ですが、発掘調査の結果、近世の石列造構、畦畔状造構、水田造成のための掘削跡などが確認される一方、弥生時代の土地利用は相対的に少なかったという貴重な成果を得ることができました。

発掘調査の実施にあたり、御理解と御協力をいただきました地元関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、これらの調査成果が学術的な資料として広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

令和2年3月31日

長崎県教育委員会教育長

池 松 誠 二

例　　言

1. 本書は、原の辻遺跡調査研究事業として実施した、平成30年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。
2. 本事業は、遺跡範囲内の環濠や旧地形等の状況調査を目的として、平成14年度から実施している。
3. 本書に収録した調査区の所在地は、長崎県壱岐市芦辺町深江平触である。
4. 平成30年度の調査は長崎県教育委員会が主体となり、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室が担当した。

調査組織

調査指導委員会 委員長	西 谷 正（九州大学名誉教授）
委 員 大 坪 志 子	（熊本大学埋蔵文化財調査研究センター助教）
委 員 工 樂 善 通	（大阪府立狭山池博物館館長）
委 員 佐 古 和 枝	（関西外国语大学教授）
委 員 徐 光 輝	（龍谷大学教授）
委 員 高 倉 洋 彰	（西南学院大学名誉教授）
委 員 武 末 純 一	（福岡大学教授）
委 員 村 上 恭 通	（愛媛大学教授）

[委員記載は50音順]

長崎県埋蔵文化財センター

所　　長	石 橋　明
東アジア考古学研究室長	寺 田 正 剛
東アジア考古学研究室 主任文化財保護主事	古 澤 義 久（調査・整理担当）
東アジア考古学研究室 文化財保護主事	長 岡 康 孝（調査担当）
調 査 課 主任文化財保護主事	山 犀 千 晶（調査補助）
調 査 課 文化財調査員	千 原 和 己（調査補助）

また、龍谷大学大学院生　楊方昊、孟磐、龍谷大学学生　蔡寧、劉愈辰が研修の一環として遺構測図にあたった。

5. 本書で使用した遺構・遺物の実測、製図、写真撮影は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。
6. 本書に収録した遺物・図面・写真類は、長崎県埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書で用いた座標は旧日本測地系である。
8. 本書で用いた方位は座標北である。
9. 本書の中国語要旨の翻訳は内蒙古大学蒙古歴史学系王達来講師に依頼した。韓国語要旨は古澤義久が作成し、釜山市庁文化遺産課金恩鎬学芸研究官が校閲した。
10. 本書の執筆は「地理的環境」、「調査の経緯と進行」を長岡康孝、残りを古澤義久が行った。
11. 本書の編集は古澤義久が行った。

本文目次

I 遺跡の立地する環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	2
3. 民俗的環境	4
II 調査の経緯と進行	6
1. 調査の経緯	6
2. 調査の進行	6
III 芦辺高原地区的調査	8
1. 調査概要	8
2. 基本層序	8
3. 遺構	24
4. 出土遺物	28
IV 総括	37
韓国語・中国語要旨	39
付 編	
原の辻遺跡出土碇石について	54
原の辻遺跡の花粉分析	(株式会社 バレオ・ラボ) 63

挿図目次

図1 壱岐島位置図	1
図2 水田畦畔における石列（壱岐市石田町石田東触）	5
図3 2018年度調査研究事業調査区位置図（1/8,000）	7
図4 これまでの芦辺高原地区における調査と今次の調査区	9
図5 2018年度芦辺高原地区調査区全体図	9
図6 1a区平面図・土層図	10
図7 石列遺構	11
図8 畦畔状遺構検出	12
図9 1b区平面図・土層図	13
図10 2a区平面図・土層図	14
図11 2b区平面図・土層図	15
図12 3a区平面図・土層図	16
図13 3b区平面図・土層図	17
図14 4a区平面図・土層図	18
図15 4b区平面図・土層図	19

図16	5 a 区平面図・土層図	20
図17	5 b 区平面図・土層図	21
図18	出土陶磁器(1)	29
図19	出土陶磁器(2)	30
図20	出土陶磁器(3)	31
図21	出土土器	34
図22	出土石器(1)	34
図23	出土石器(2)	35
図24	出土錢	36
図25	出土木製品	36

表 目 次

表1	調査区座標	8
表2	層序対応表	23
表3	土器観察表	36
表4	石器観察表	36

写 真 目 次

カラー写真1	2018年度調査区遠景（内海湾を望む）
カラー写真2	2018年度調査区遠景（丘陵部を望む）
カラー写真3	2018年度調査区
カラー写真4	基本層序（3 b 区西壁）
カラー写真5	2 a 区 1号溝（北から）
カラー写真6	2 b 区 2号溝（北から）
カラー写真7	4 a 区 3号溝（北から）
カラー写真8	3 a 区掘削跡（東から）
カラー写真9	3 b 区鉤手状掘削跡（北から）
カラー写真10	1 a・1 b 区石列遺構と畦畔状遺構（南西から）
カラー写真11	1 a 区石列遺構（南東から）
カラー写真12	1 b 区畦畔状遺構（南西から）

写真1 2 a 区 1号溝検出状況

写真2 1 a 区 1号溝断面(1)

写真3 1 a 区 1号溝断面(2)

写真4 2 b 区 2号溝検出状況

- 写真5 4 a 区 3 号溝遺物出土状況
- 写真6 4 b 区 4 号溝
- 写真7 2 b 区掘削跡
- 写真8 3 区掘削跡
- 写真9 1 a 区石列遺構（北西から）
- 写真10 1 a 区石列遺構（南西から）
- 写真11 1 a 区石列遺構矢穴(1)
- 写真12 1 a 区石列遺構矢穴(1)細部
- 写真13 1 a 区石列遺構矢穴(2)
- 写真14 1 a 区石列遺構矢穴(2)細部
- 写真15 1 a 区石列遺構矢穴(3)
- 写真16 1 a 区石列遺構矢穴(3)細部
- 写真17 1 a 区石列遺構矢穴(4)
- 写真18 1 a 区石列遺構矢穴(4)細部
- 写真19 1 a 区・1 b 区畦畔状遺構（南西から）
- 写真20 1 b 区畦畔状遺構（南から）
- 写真21 1 b 区畦畔状遺構断面
- 写真22 1 b 区畦畔状遺構藁敷設状況
- 写真23 1 b 区畦畔状遺構藁敷設状況細部
- 写真24 1 b 区畦畔状遺構木杭打設状況(1)
- 写真25 1 b 区畦畔状遺構木杭打設状況(2)
- 写真26 1 b 区畦畔状遺構木杭打設状況(3)
- 写真27 3 b 区木杭打設状況
- 写真28 5 b 区木杭打設状況

I 遺跡の立地する環境

1. 地理的環境

原の辻遺跡の所在する壱岐島は、長崎県の北部、九州北西海上の玄界灘に浮かぶ島である。東西約15km、南北約17km、総面積約138.57m²の本島と28の付属島からなり、芦辺、石田、勝本、郷ノ浦の4町が2004（平成16）年に合併して壱岐市を構成している。小規模な島であるが、古来より日本列島から韓半島・中国北部へと通ずる海上の要衝としての位置にあった。壱岐鶴分寺の平城宮式瓦の出土からもそのことが窺える。直線距離で一番近い本土は、佐賀県唐津市鎮西町の波戸岬で、石田町海豚鼻との距離はおよそ20km。対馬との距離は、厳原町ワゴ浦と勝本町タンス浦間でおよそ48kmである。その距離であるが故に、旧石器時代から近現代に至るいずれの時代においても中国や韓半島からの大陸・半島系の遺物が出土するという特徴があり、日本国内の考古学の視点だけではなく、中国、韓国の考古学の視点からも分析することができるが壱岐島である。

壱岐島の東南に開いた内海湾の奥から川幅の狭い轔鉢川を溯ると、周囲を100m前後の丘陵に取り囲まれた長崎県で2番目に広い沖積平野の深江田原に出る。原の辻遺跡は丘陵部から深江田原に舌状に伸びた台地を中心に構成されている。しかし、原の辻遺跡は「耳切りの辻」と呼ばれるほど、冬季には厳しい北西風が吹き込む場所にあり、生活するにはあまり適した立地条件とは言えない。そうであるにもかかわらず、敢えて原の辻の台地に集落を形成したのは、内海湾は外海より比較的波も穏やかで、船待ちが可能であり、かつ定住に必要な生産力を兼ね備えた場所と見なしたため（古澤2016）ではないかと考えられている。

[引用・参考文献]

古澤義久2016「東アジアにおける原の辻遺跡」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集



図1 壱岐島位置図

2. 歴史的環境

原の辻遺跡は深江田原平野に立地する約100haの広大な環濠集落遺跡である。ここでは、原の辻遺跡自体の歴史的な変遷について概観する。

(1) 旧石器時代・縄文時代草創期

原の辻遺跡で最初に人類活動が確認されるのは旧石器時代ナイフ形石器文化期である。不條地区、八反地区、原地区、大川地区、柏田地区、池田大原地区、萱ノ木地区、原の久保地区、鶴田地区でナイフ形石器、剥片尖頭器、台形石器、石錐、抉入搔器などの遺物が出土している。遺構としては萱ノ木地区で落し穴状の土坑が1基発見されている。ナイフ形石器文化期における包含層が確認された地点の変遷はAT降灰直前の鶴田遺跡（萩原編年中期段階1）→AT降灰後の原3区（中期段階2）→萱ノ木地区（中期段階4）となる。このほか原位置から遊離した資料の中で時期が比較的明確なものとしては原の辻型台形石器、国府型、狸谷型ナイフ型石器、西北九州型角錐状石器が中期4期、基部裏面加工のナイフ型石器、枝去木型台形石器が後期段階2とみられる。原の辻遺跡ではAT降灰後に最初の人類の足跡がみられ、その後旧石器時代後・晩期まで連続と継続している。

原の辻遺跡では川原畠地区、不條地区、八反地区、高元地区、原地区、芦辺高原地区、石田大原地区、大川地区、原ノ久保A地区で20点以上の細石刃、細石刃核が出土している。細石刃核には旧石器時代の野岳型が不在で、全てを縄文時代草創期の所産とみることができる。細石刃文化期の遺物は丘陵部での出土が激減し、低地部での出土量が丘陵部の5倍弱にのぼることから標高の低い地点への進出が進行したものと想定される。

(2) 縄文時代

確実に縄文時代早期以降と考えられる遺物として、坂の下式土器、局部磨製石錐、剥片錐、石匙、楔形石器、鎌崎型スクレイバーが不條地区、八反地区、高元地区、石田高原地区、萱ノ木地区、石田大原地区、大川地区、原ノ久保A地区、原ノ久保B地区、池田大原地区、原地区で出土している。このほか多くの打製石錐や磨石・凹石・敲石、石皿などが出土しているが弥生時代のものと判別が困難である。これまでのところ弥生時代以降の堆積層から出土しており、遺構等も確認されていない。時期としては坂の下式土器、剥片錐、基部のみを研磨する局部磨製石錐、鎌崎型スクレイバーなどから縄文時代後期前葉を中心とする時期に土地が利用されたことが想定されるが、石匙などの一部の遺物は縄文時代早・前期に位置づけられる可能性がある。これまで出土した縄文時代遺物は土器よりも石匙や石錐などの石器が多く、原の辻遺跡周辺は一時的な野営地や狩猟場であった可能性が高いものと思われる。

(3) 弥生時代

1期 原の辻遺跡集落形成期（弥生時代前期後葉～前期末）

弥生時代の原の辻遺跡における最古の遺物は板付II式であり、それ以前の遺物はほとんど知られていない。前項で述べたとおり縄文時代に拠点集落が確認されず、また弥生時代早期～前期中葉までの遺物もほとんど知られていないことから、原の辻遺跡の集落は、前代から連続と継承されたものではなく、弥生時代前期後葉に突如、誕生したものであるとみるのが妥当である。この段階の居住域は丘

陵先端部の高元地区にみられ、東側低地部には大溝が掘削された。墓域は原地区に集約して形成され、後に大原地区に移動する。

II期 原の辻遺跡集落確立期（弥生時代中期初頭～中期中葉）

丘陵裾部に環濠が廻り、丘陵部全体で居住域がみられる。この時期には多くの外来系遺物がみられ北西低地部に多くの粘土帶土器が集中して出土する。西側低地部に船着き場が設けられる。北側丘陵の閑縁地区で列埋葬が確認されている。I期から形成された大原地区的墓域が拡張する。

III期 原の辻遺跡集落第1次盛行期（弥生時代中期後葉～中期末）

III期はII期で確立した環濠集落が盛行する時期であり、集落自体の規模は拡張していく。丘陵頂部ではあまり建物が建てられず、公共性が高い空間であった。この最頂部を取り囲む形で有力者の居住域があつたものとみられる。低地部では環濠が複雑化し、多重の環濠が掘りめぐらされる。小規模な青銅器・鉄器生産が行われていた可能性があるが、大規模な工房は確認されていない。この時期にも大陸系遺物は多く確認されており、対外交流の拠点であった。墓域は大原地区に加え、大川地区、原の久保地区、萱ノ木地区に拡がる。

IV期 原の辻遺跡集落後退期（弥生時代後期前葉）

紀元前後を境に集落は一時衰退する。船着き場は機能を失っている。低地部で粒子の細かい灰白色の粘質土層が確認されており、大規模な水害に伴う低地部の水没によって衰退したという考えがある。墓域は大川地区、原の久保地区、萱ノ木地区で確認されていることから、集落の拠点がほかの地点に移動した可能性がある。

V期 原の辻遺跡第2次盛行期（弥生時代後期中葉～後期後葉）

環濠も再掘削され、丘陵部に生活拠点が戻る。丘陵頂部は祭儀場として利用された。居住区は祭儀場東側斜面に集中して築かれている。墓域はIV期に建造されたものが拡大する傾向にある。

VI期 原の辻遺跡解体期（古墳時代初頭）

古墳時代初頭までは低地に環濠も存在し、環濠内で生活が営まれていたものの、その後、多重の環濠も埋没し、集落は解体する。

【引用・参考文献】

川道寛2014「旧石器時代～縄文時代草創期の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4

川道寛・古澤義久編2016「原の辻遺跡総集編Ⅱ」長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集

福田一志・中尾篤志編2005「原の辻遺跡総集編Ⅰ」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集

古澤義久・田中聰一2014「縄文時代の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4

松見裕二2013「原の辻遺跡の概要」『原の辻遺跡－原の辻遺跡出土資料集成－』壱岐市文化財調査報告書第

21集

宮崎貴夫2008「原の辻遺跡壱岐に甦る弥生の海の王都」同成社

3. 民俗的環境

今次の原の辻遺跡調査では近世の水田関係遺構が多数発見された。中でも石列遺構や畦畔状遺構などは注目される遺構で、これらの遺構は水田の境界に位置したものと考えられる。そこで、ここでは田畠の境界に焦点をあてて、壱岐島の民俗事例について検討する。

【礫を用いた水田の境界】

水田の境界には畦が設けられるのが一般的である。ただし、壱岐島では傾斜面に水田が造成されることも多く、この場合、礫を積んで法面とする場合も多い。このほかに、水田の畦の基礎として、あるいは道などとの境界に礫を積み、その上に土を載せて、畦とする事例も多数確認される。

壱岐市石田町石田東触の水田では、道から約1.5m程度嵩上げして水田が造成されている。道との境界には畦が設けられているが、畦の基盤には、30~50cm程度の玄武岩を1~3段程度、積まれている（図2-1, 2, 3, 5）。道に面する部分に面を揃えている。上に土が載せられていない部分を観察すると、水田側の面は揃えられていない（図2-4）。また、礫の上には土が積まれるため、必ずしも礫の上面も面として揃えられていない。礫を観察すると、今次調査区1a区石列遺構でもみられた細い丸棒状の道具による矢穴が観察され（図2-6）、石材獲得方法における共通性を看取することができる。

【田畠の境界に関する口承】

壱岐島では「田畠の境界はよくクヂって少しでも自分の土地を広めようとするものだが、いくら隣の土地をクヂっても、野辺の飯にするだけよりクヂり出せないものである」といわれていたようである（山口1934）。このような口承が存在することから、田畠の境界が侵害されることがしばしばあったこと、田畠の境界の侵害は諫められるようなことであったことなどを窺うことができる。このような観点からみると、畦畔や道の境界に礫群を配置することは、物性的に畦畔を強化すること以外に、田畠の境界の侵害を防止する役割があったものと推定される。

【近世壱岐島の土地利用制度と田畠の境界】

近世の壱岐島では「廻作」、「十年割」と称される地割が存在し、領主公認のもと、一定の土地を住民が輪番で耕作する制度があった。その目的は貧富の懸隔を防ぎ、万民等しく生計を立ち得ることにあったとみられている。土地の割替は基本的には村民協議の結果、自由に決定するものであったが、10年に1回行うのが一般的であった。（奥田1923）。もともとは平戸藩全体に布かれたもので、壱岐では最後までこれが存続したものであるともされる（山口1960）。この制度の開始期は正保4（1647）年とする説（奥田1923）と永祿10（1567）年以前（山口1960）とする説がある。以後、江戸時代を通して行われ、明治時代の地租改正で土地が私有化されるまで存続した。このような土地割替という土地利用制度は、正確な田畠の評価がその前提となることから、田畠の境界が強く意識されたものとみられる。その場合、田畠の境界に構築物が設けられるのは、円滑な土地利用のために必要なことであつただろうと考えられる。

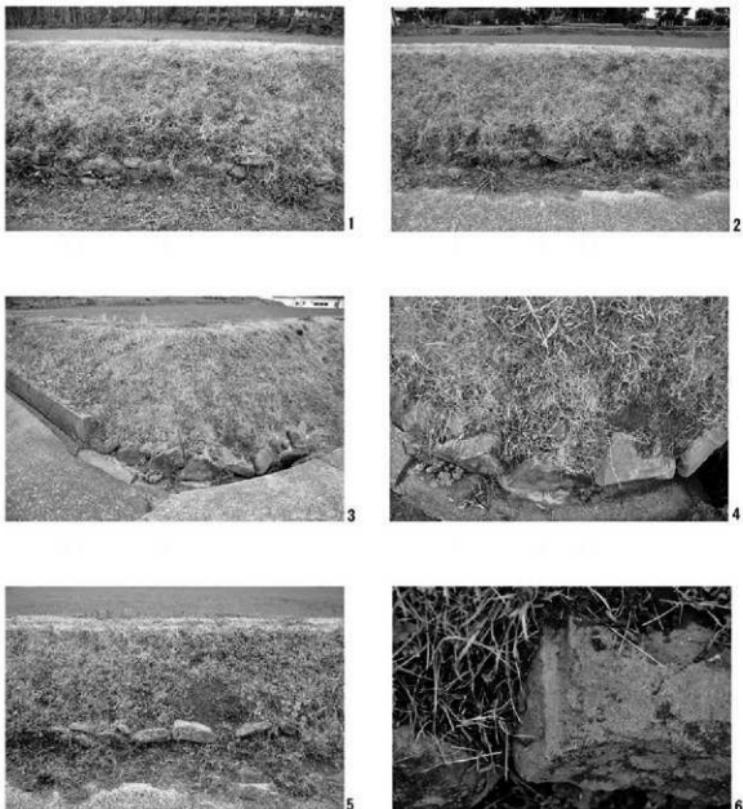


図2 水田畦畔における石列（壱岐市石田町石田東触）

〔引用・参考文献〕

奥田或1923「壱岐国に於ける地割制度」『京都帝国大学経済学会 経済論叢（一）（二）』17-2, 3

山口麻太郎1934『壱岐島民俗誌』一誠社

山口麻太郎1960「平戸藩地割制度の起源について」『地方史研究』10-6

II 調査の経緯と進行

1. 調査の経緯

原の辻遺跡は、壱岐在住の小学校教諭松本友雄によって明治37年（1904年）頃に発見された。その後、大正初期から昭和初期にかけて、鳥居龍蔵、黒板勝美、梅原末治、中山平次郎、森本六爾なども踏査している。本格的な調査が行われたのは、戦後の昭和26年（1951年）～39年（1964年）に九学会と東亜考古学会が実施した調査が最初である。しかし、その後しばらく調査は中断されていた。昭和28年（1953年）、昭和49年（1974年）に東亜考古学会が実施した調査地点から400mほど離れた石田大原地区で石棺材と甕棺破片が散乱しているのが発見されて、緊急調査が実施された。昭和30年代から昭和40年代にかけて、農業近代化の波が壱岐にも押し寄せており、この石棺材と甕棺破片の散乱も、饅頭状に盛り上がった畑を水田にするため表面を削平した際に、遺構の一部が破壊されたものだった。この時の緊急調査では弥生中期を主体とする墓域が確認された。この発見により、遺跡の規模が広範囲であると予察されたため、長崎県教育委員会は昭和50年（1975年）～52年（1977年）に範囲確認調査を実施している。また、平成3年（1991年）からは遺跡北側を流れる幡ヶ浦川流域約400ヘクタールについて、河川改修と大規模圃場整備のための整備事業が計画された。これに先立ち、県教育委員会ではこれまで未確認だった水田部分の低地で試掘調査を実施し、平成5年（1993年）以降、広大な面積の発掘調査が実施された。その結果、遺跡は100haの範囲にも及び、台地を多重環濠で開む大規模環濠集落であることが判明した。平成7年（1995年）には、原の辻遺跡が『魏志』倭人伝に記された「一支国」の国邑であることが確定し、平成8年（1996年）には、弥生時代中期前半に築かれた日本最古の船着き場遺構が発見された。この一連の発掘調査の成果により、平成9年（1997年）に原の辻遺跡は国史跡に指定され、平成12年（2000年）には特別史跡に指定された。平成14年（2002年）以降は、原の辻遺跡の集落構造の把握を目的とした調査研究事業が進められている。

平成30（2018年）年度は原の辻遺跡の北側に位置する芦辺高原地区的調査を行った。丘陵北部の低地で、環濠の外側に当たる。平成28（2016年）年度の調査区に隣接しており、この調査区では古墳時代の溝が発見されている。丘陵と旧河川の間の土地利用を明らかにすることを目的とした調査を行った。

2. 調査の進行

平成30（2018年）年度は、平成30年（2018年）11月1日から同年12月28日まで調査を実施した。11月1日、2日に調査区の設定し、バックホウによる表土、客土の掘削を行った。造成土がほとんど確認されず60cm程度の深さで整えた。翌週11月5日から人力による掘削を開始した。粘質の強い土の層が多く掘削に時間がかったものの、11月中に1区から3区まで弥生時代以前の無遺物包含層まで完掘の目処が立ったため、11月30日に4区、5区を追加し、バックホウによる表土、客土の掘削を行った。12月11日には原の辻遺跡調査指導委員会を開催し、指導委員から現地指導を得た。12月14日には航空写真を撮影、12月18日から順次埋め戻しを開始し、12月28日に全作業を終了した。発掘調査期間中には、12月4日から7日まで龍谷大学の学生4名が発掘実習を行った。11月19日に熊本大学の小畠弘己教授が視察に来られ、12月14日に福岡大学の武末純一指導委員による現地指導を得た。



図3 2018年度調査研究事業調査区位置図（1/8,000）

III. 芦辺高原地区の調査

1. 調査概要 (図4, 図5)

調査区は、現在の水路から10m 東側に暗渠を避けるように5箇所設定した。西から東へ1区～5区とし、それぞれ5m×20mの調査区で、総調査面積は500m²である。表土と客土をバックホウで掘削した後、安全と土壤排出等作業上の理由から、小区画を設定した。小区画は調査区内を2分割し、西からa区(2.5m×8.25m)、b区(2.5m×8.25m)とし、小区画間は1mはなれている。また、調査期間中、降雨や湧水などの影響で土層が崩落する可能性があったので、不整形に土層を除去した箇所がある。

発掘調査の結果、1a区で石列遺構1条、1a区と1b区に跨って畦畔状遺構1条、1a区～3b区で掘削跡、2a区、2b区、4a区、4b区で溝状遺構が合計4条発見された。調査終了後は、掘削面に砂を30cm程度、敷いた上で埋め戻し、遺構等の保護を行った。

表1 調査区座標

調査区	杭	X	Y
1区	北西杭	84365.532	23389.306
	北東杭	84369.473	23408.866
	南東杭	84364.591	23409.848
	南西杭	84360.670	23390.225
2区	北西杭	84359.638	23410.865
	北東杭	84365.575	23440.226
	南東杭	84360.700	23441.223
	南西杭	84354.889	23411.793
3区	北西杭	84375.460	23438.280
	北東杭	84379.328	23457.884
	南東杭	84374.449	23458.882
	南西杭	84370.512	23439.271

2. 基本層序

今次調査では各調査区で土層堆積が異なる部分だったので、調査区ごとに層序番号を配した。客土下の土層は次のとおりである。

【1区】(図6, 図9)

1層：褐色(7.5YR4/3)粘質土。8層に由来するとみられるにぶい黄橙色(10YR6/3)がブロック状に入る。粘性弱。しまり弱。

2層：褐色(7.5YR4/3)粘質土。赤褐色(5YR4/6)が斑に混じる。黒色(5YR1.7/1)の粒子を含む。粘性弱。しまり強。

3層：褐色(7.5YR4/3)粘質土。褐灰色(7.5YR4/1)がブロック状に混じる。粘性弱。しまり強。

4層：黒褐色(10YR2/2)粘質土。褐色(7.5YR4/3)がクラック状に入る。粘性極強。しまり弱。



図4 これまでの芦辺高原地区における調査と今次の調査区

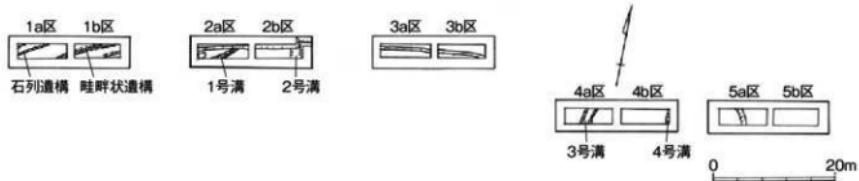


図5 2018年度芦辺高原地区調査区全体図

- 5層：褐色（7.5YR4/4）粘質土。4層より赤みが強い。粘性強。しまり弱。
- 6層：褐色（7.5YR4/4）粘質土と灰黄褐色（10YR5/2）粘質土の混合。粘性強。しまり弱。
- 7層：褐色（7.5YR4/4）粘質土と灰黄褐色（10YR5/2）粘質土の混合。粘性強。しまり弱。
- 8層：灰黄褐色（10YR3/2）粘質土。明黄褐色（10YR6/6）は混じる。粘性強。しまり強い。下部に黒色（10YR2/1）が帯状に入る。

【2区】(図10, 図11)

- 1層：暗褐色土。
- 2層：暗灰褐色粘質土。

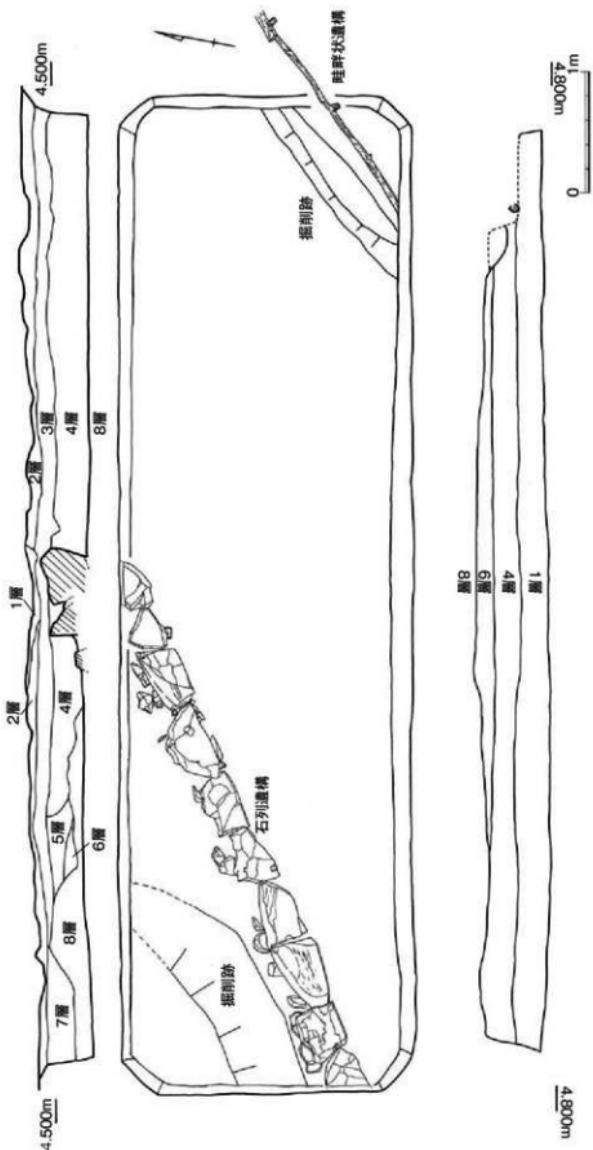


図6 1a区平面図・土層図

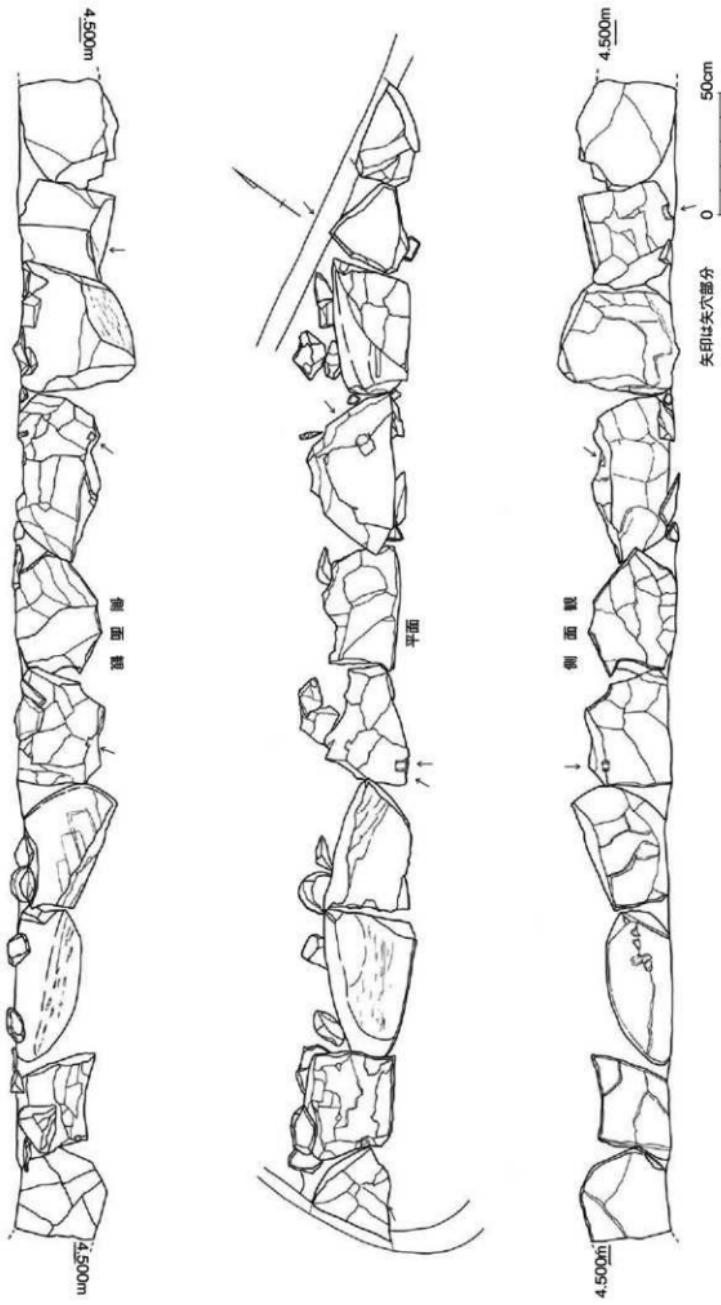


図7 石列造構

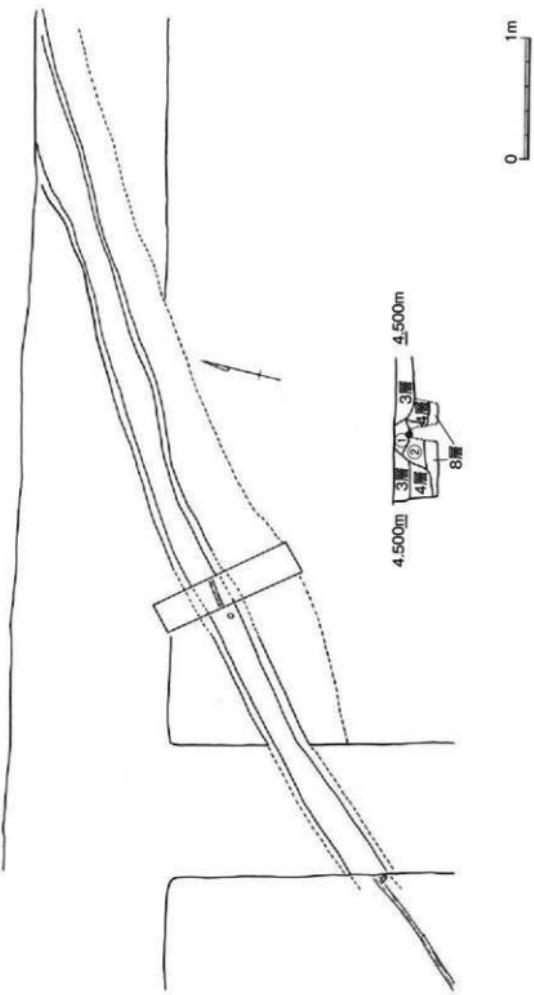


图 8 畦畔状遺構検出

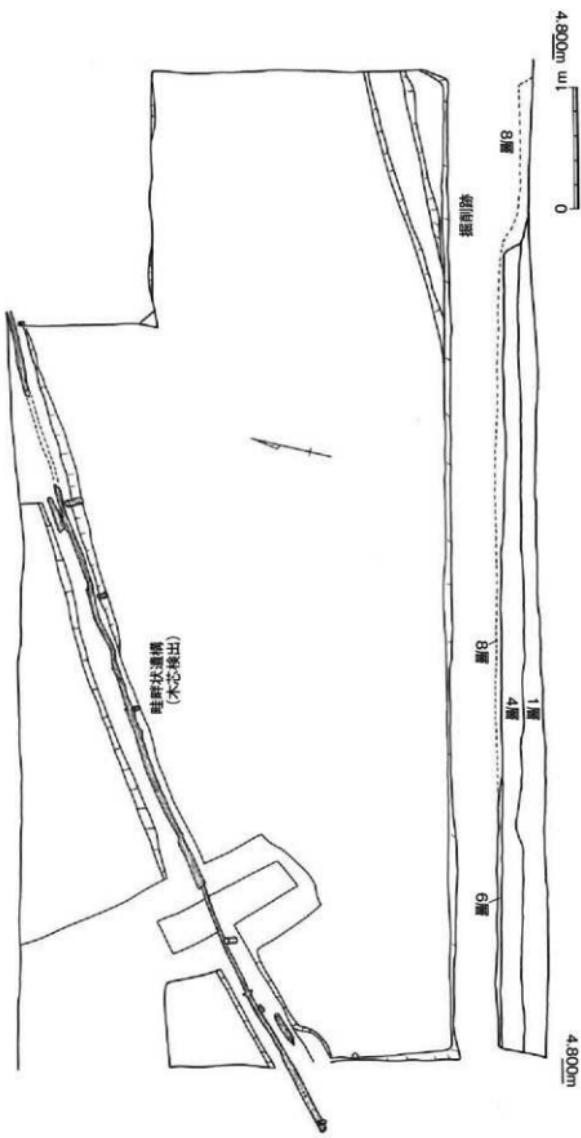


図9 1b区平面図・土層図

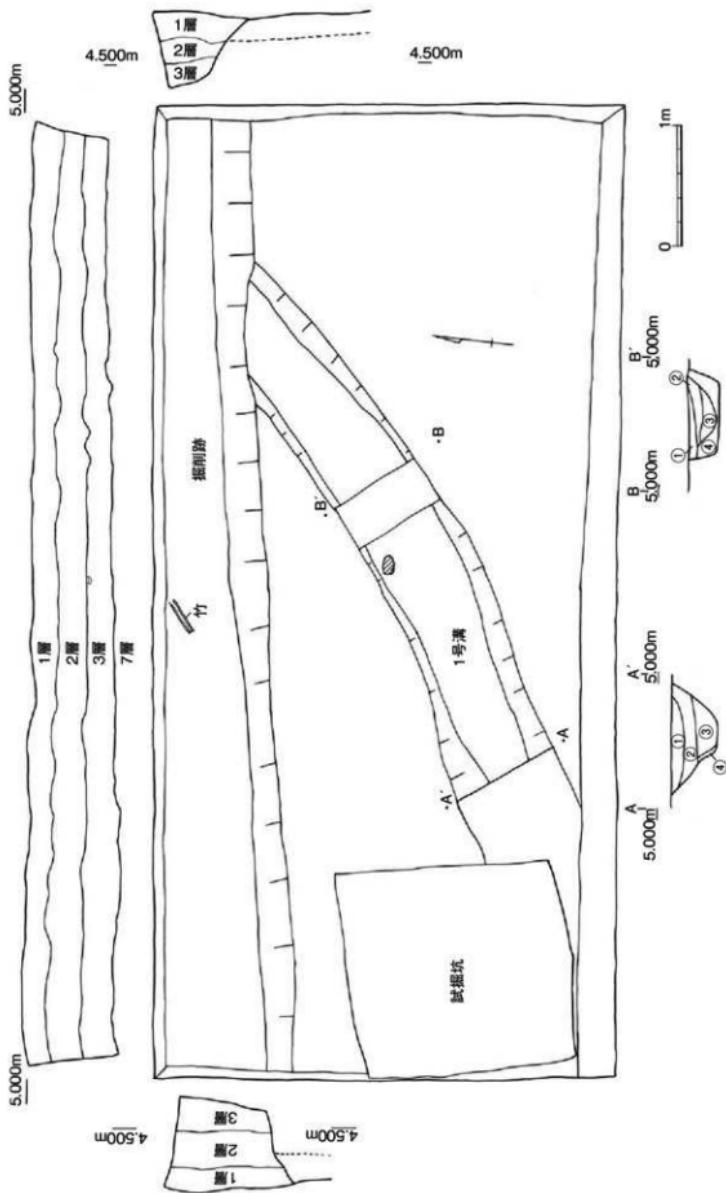


図10 2a区平面図・土層図

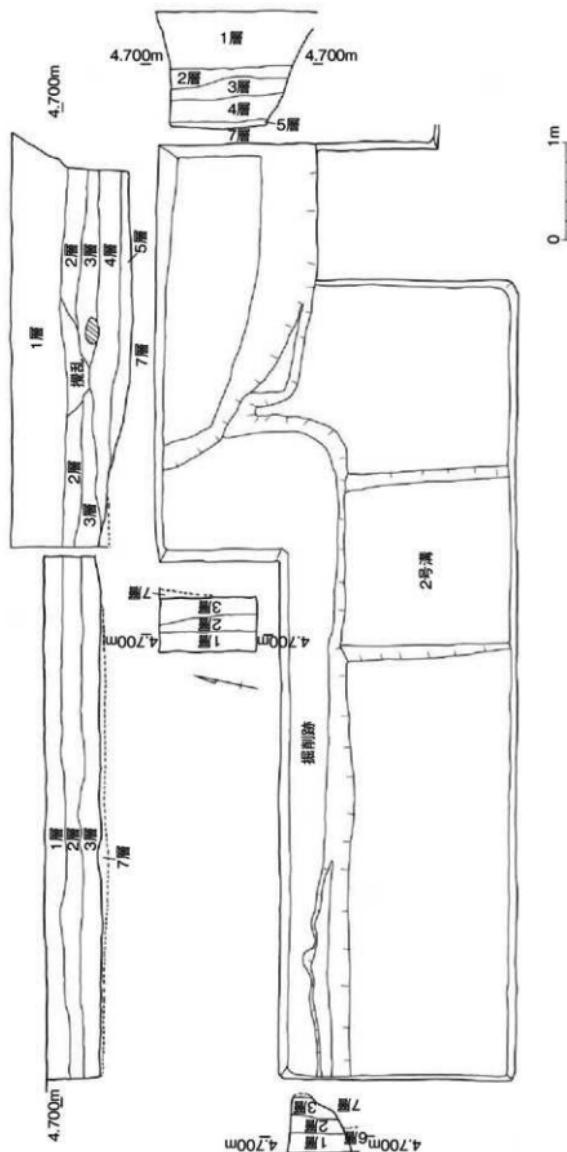


図11 土層圖・平面圖 2b 区

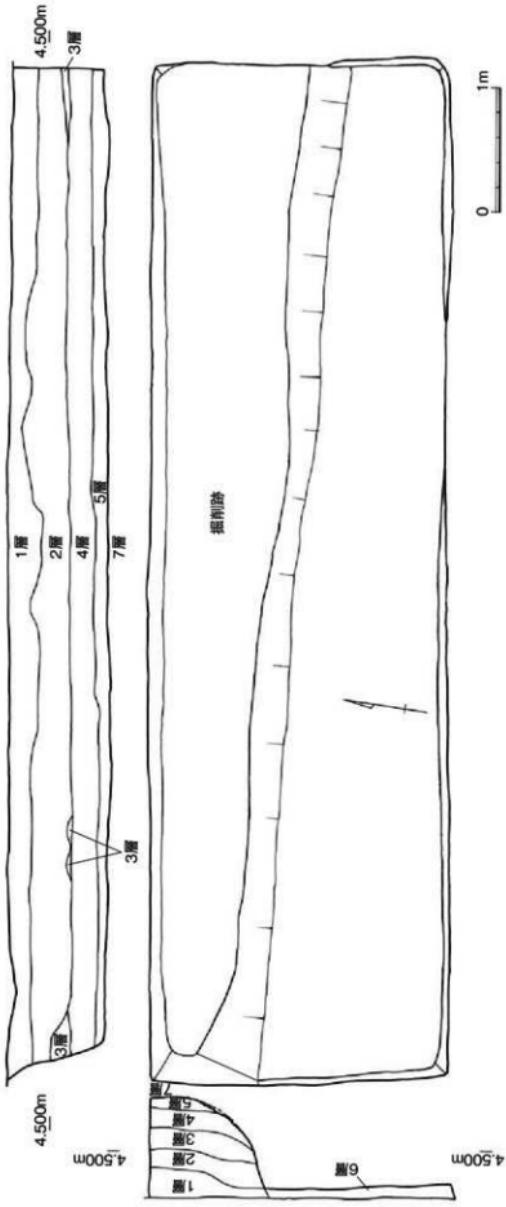


図12 3a区平面図・土層図

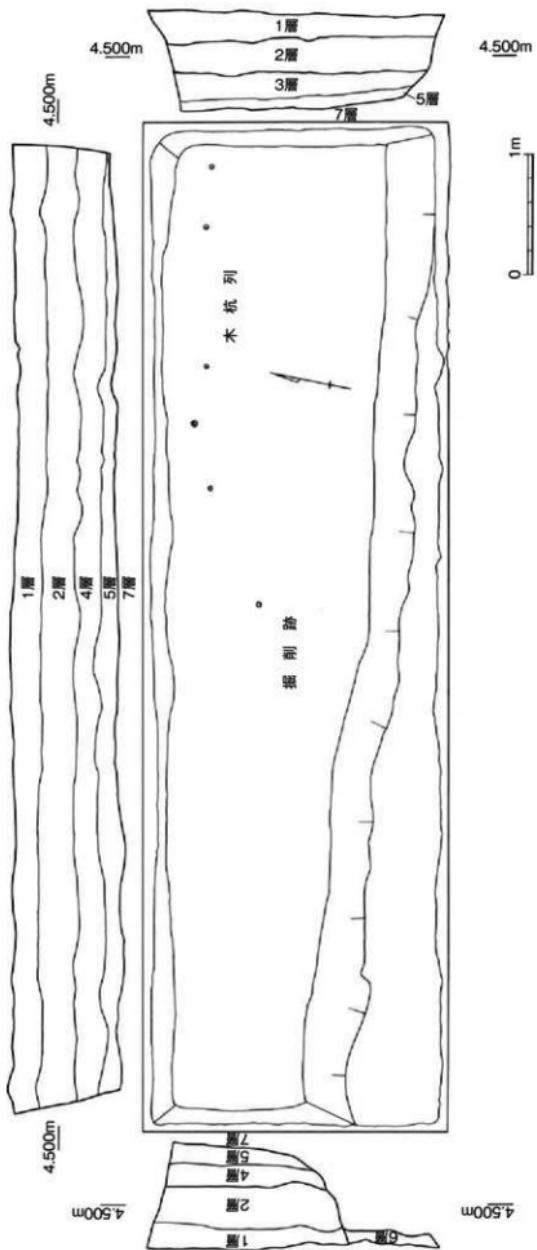


図13 3 p区平面図・土層図

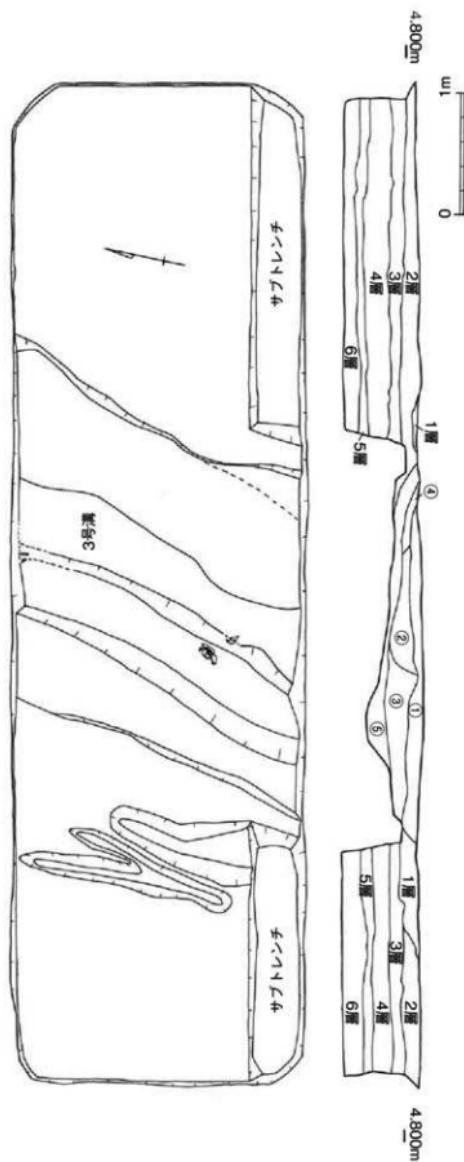


図14 4a区平面図・土層図

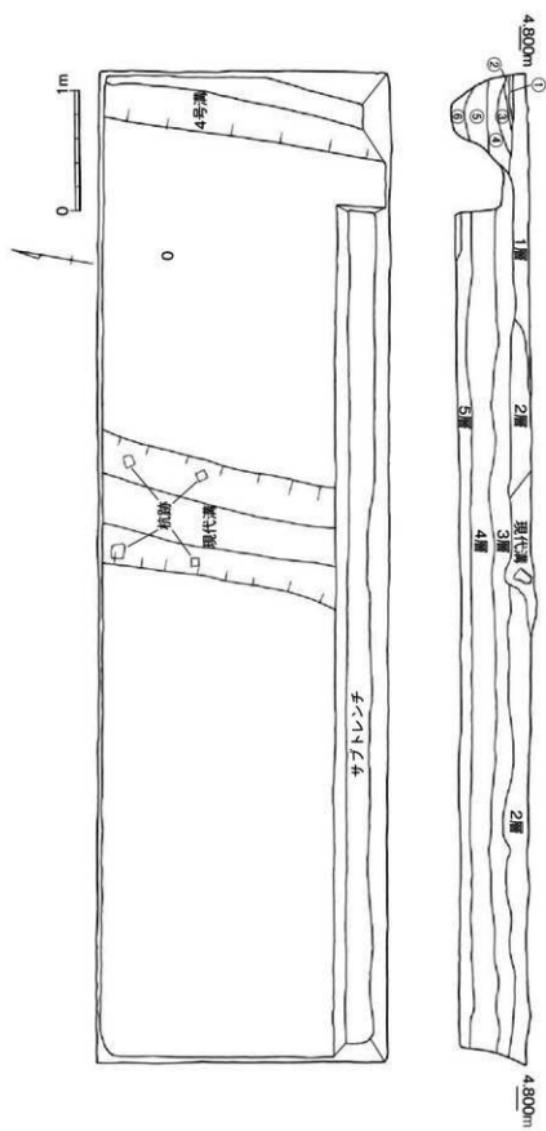


図15 4b区平面図・土層図

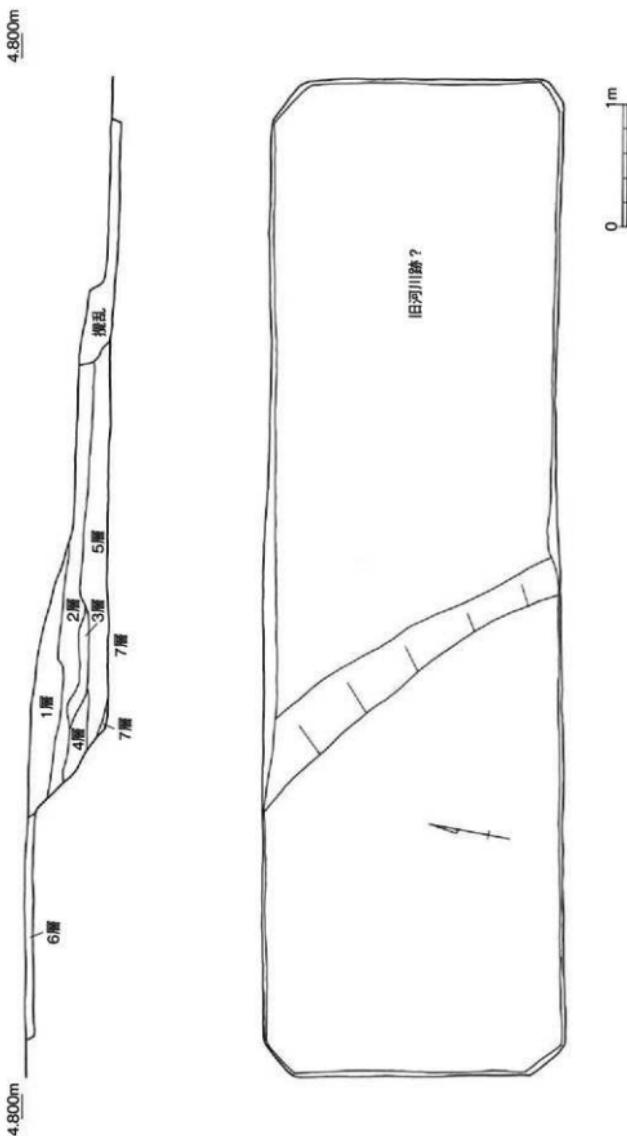


図16 5a区平面図・土層図

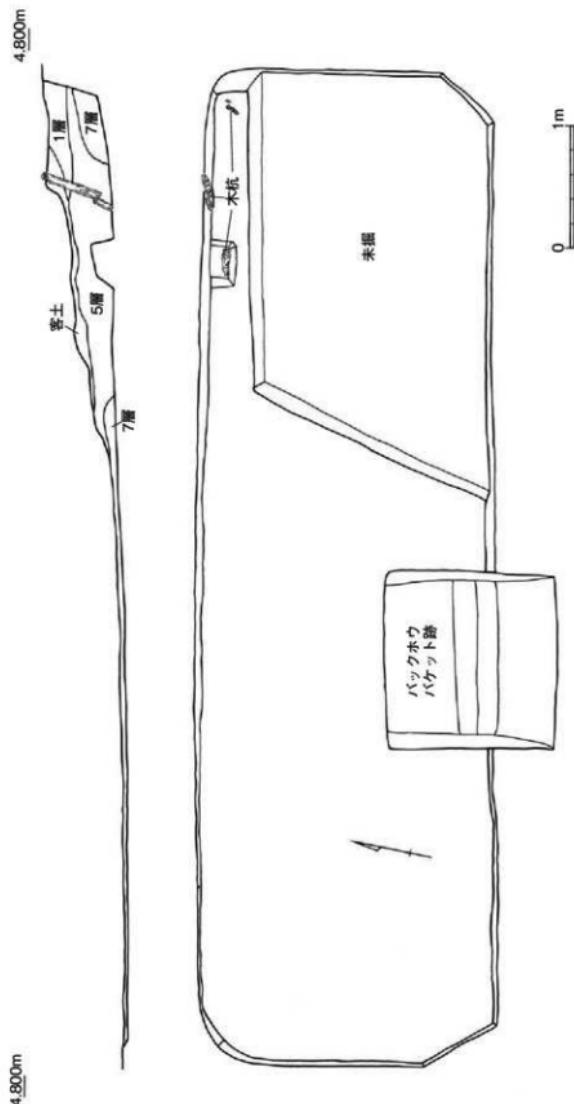


図17 5 b 区平面図・土層図

- 3層：暗灰色粘質土。鉄の貫入が多い。
- 4層：暗灰色粘質土。粘性強。青灰色粘質土を含む。
- 5層：青灰色粘質土。4層との境界は波をうったような形状。
- 6層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルト土。φ2cm程度の黒色（7.5YR1.7/1）粒子が多量に混じる。粘性やや強。しまりやや強。
- 7層：青灰色粘質土。

【3区】(図13、図14、カラー写真4)

- 1層：にぶい褐色（7.5YR5/4）粘質シルト土。粘性やや弱。しまりやや強。
- 2層：灰褐色（7.5YR4/2）粘質シルト土。粘性やや弱。しまりやや強い。
- 3層：灰黄褐色（10YR4/2）粘質シルト土。粘性は2層よりも強。しまり強。
- 4層：褐灰色（10YR5/1）粘質土。粘性極めて強。しまり極めて強。
- 5層：灰色（N5/）粘質土。4層と7層の混合層。粘性極めて強。しまり極めて強。
- 6層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルト土。φ2cm程度の黒色（7.5YR1.7/1）粒子が多量に混じる。粘性やや強。しまりやや強。
- 7層：青灰色（10BG5/1）粘質土。粘性やや強。しまりやや強。

【4区】(図14、図15)

- 1層：暗褐色（10YR3/4）粘質シルト土。粘性強。しまり強。層全体に弱い鉄分沈着がみられる。
- 2層：褐色（10YR4/4）粘質シルト土。粘性極めて強。しまり極めて強。層全体に弱い鉄・マンガンの沈着がみられる。
- 3層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質シルト土。粘性強。しまり強。層全体に鉄・マンガンの沈着がみられる。
- 4層：灰黄褐色（10YR6/2）粘質シルト土。粘性強。しまり極めて強。層全体に鉄・マンガンの沈着がみられる。
- 5層：暗灰黄色（2.5YR5/2）粘質シルト土。粘性強。しまり極めて強。層全体に鉄分の沈着がみられる。
- 6層：灰白色（10YR7/1）シルト質粘土。粘性極めて強。しまり極めて強。

【5区】(図16、図17)

- 1層：褐色（7.5YR4/4）粘質土。黒色（7.5YR1.7/1）混じり。粘性強。しまり強。φ1cm程度の礫混じり。
- 2層：褐色（7.5YR4/4）粘質土。粘性強。しまり弱。
- 3層：褐色（10YR4/4）粘質土。粘性強。しまり弱。
- 4層：暗褐色（10YR3/4）粘質土。部分的に褐色（10YR4/4）が混じる。粘性強。しまり弱。
- 5層：暗褐色（10YR3/3）粘質土。部分的に青灰色（10BG5/1）が混じる。粘性弱。しまり強。
- 6層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土。φ2cm程度の黒色（7.5YR1.7/1）粒子が多量に混じる。

粘性強。しまり強。

7層：青灰色（10BG5/1）粘質土。灰オリーブ色（7.5YR6/2）混じり。粘性強。しまり強。

各調査区で細分された層位を対応したのが表2である。大別層位としてI層～VI層に整理することができる。想定される時期については包含層中の最新遺物に基づいて判断した。

I層：褐色系粘質土。黒色粒子混じる。近世堆積土。

II層：褐色系粘質土。近世堆積土。

III層：暗灰色系粘質土。掘削跡（後述）に堆積している。1a区4層での花粉分析結果によると、草本花粉ではイネ科の卓越、水田雜草を含む好湿性植物の産出などから周辺に水田が存在した可能性が提起されていることから、近世水田耕作土であると考えられる。

IV層：暗灰色系粘質土（III層）に青灰色系粘質土（VI層）が斑に混じる。掘削跡にのみ堆積している。III層とIV層の境界は波打った部分があり、踏み込みが想定されることと、上層が水田耕作土であることから、近世水田床土であるとみられる。

V層：灰白色系粘質土。直径1cm程度の黒色粒が多く混じる。弥生時代以前の無遺物層。

VI層：青灰色系粘質土。黒変した層が帯状に入る。弥生時代以前の無遺物層。

上記の層序は、隣接した調査区である2016年度調査区の基本土層とも対応している。

表2 層序対応表

	1区	2区	3区	4区	5区	2017年度芦辺高原地区
I層	1層	1層	1層	1層	1層	1層
II層	2層	2層	2層	2層	2層	
	3層		3層		3層	
III層	4層	3層	4層		5層	
	5層	4層				
IV層	6層	5層	5層			
	7層					
V層		6層	6層	3層	6層	3層
				4層		
				5層		4層
VI層	8層	7層	7層	6層	7層	5層

3. 遺構

(1) 1号溝 (図10, カラー写真5, 写真1~写真3)

【調査】

2a区で客土除去後に検出した。土層確認用の帶を残し、調査した。

【構造】

北東~南西方向に伸びる溝である。弥生時代以前の無遺物層である6層を掘り込んで構築されている。また、掘削跡に切られている。幅は検出面で約80cm、底面幅は約60cmである。断面は逆台形を呈し、残存深は約40cmである。底面の標高は約4.45m~4.50mで北側に向かって標高が低くなっている。

【覆土】

覆土は4層にわかれれる。

- ①層：褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。φ1cm程度の黒色 (7.5YR1.7/1) 粒子混じり。7層より黑色粒子は小さく、密度も疎である。粘性弱。しまり弱。
- ②層：暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土。①層より更に黒色 (7.5YR1.7/1) 粒子が小さく (φ0.5cm程度)、密度も疎である。粘性弱。しまり弱。
- ③層：暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土。φ0.5cm程度の黒色 (7.5YR1.7/1) 粒子混じり。黒色 (7.5YR1.7/1) の有機物を多量に含む。粘性弱、しまり弱。
- ④層：褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。黒色粒子をほとんど含まない。粘性弱。しまり弱。

【遺物】

遺物は出土しなかった。

【年代】

遺物が出土しなかったため、年代は不明である。近世の掘削跡に切られているため、掘削がなされる以前に構築されたことがわかる。今次調査区では最も古い遺構である。

(2) 2号溝 (図11, カラー写真6, 写真4)

【調査】

2b区で客土除去後に検出した。完掘した。

【構造】

南北方向に伸びる溝である。弥生時代以前の無遺物層である6層を掘り込んで構築されている。また、掘削跡に切られている。幅は検出面で約190cm、底面幅は約166cmである。断面は浅いU字形を呈し、残存深は約20cmである。底面の標高は約443.4m~4.525mで北側に向かって標高が低くなっている。

【覆土】

覆土は1層である。

- ①層：暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土。粘性弱。しまり弱。

【遺物】

遺物は出土しなかった。

【年代】

遺物が出土しなかったため、年代は不明である。近世の掘削跡に切られているため、掘削がなされる以前に構築されたことがわかる。

(3) 3号溝 (図14, カラー写真7, 写真5)

【調査】

4a区で客土除去後に検出した。完掘した。

【構造】

北東一南西方向に延びる。近世以降の堆積層である1層を掘り込んで構築されている。幅は検出面で約248cm、底面幅は約60mである。断面は浅いU字形を呈し、残存深は約46cmである。底面の標高は約3.270mで、ほぼ平坦である。

【覆土】

覆土は5層にわかれる。

- ①層：灰褐色（7.5YR4/2）粘質シルト土。粘性やや強。しまり強。
- ②層：にぶい黄褐色（10YR4/2）粘質シルト土。粘性やや強。しまりやや強。灰褐色（7.5YR4/2）ブロックを3割程度含む。
- ③層：褐色（10YR4/4）粘質シルト土。粘性やや強。しまり強。1mm大の黄色（2.5YR7/8）ブロックを1割程度含む。
- ④層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト土。粘性やや弱。しまりやや強。
- ⑤層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト土。粘性強。しまり強。1mm大の黄色（2.5YR7/8）ブロックをまばらに含む。

【遺物】

覆土（③層）から19世紀の土瓶が出土した。

【年代】

層序および出土遺物から19世紀以降に構築されたことがわかる。

(4) 4号溝 (図15, 写真6)

【調査】

4b区東端で客土除去後に検出した。東側は調査範囲外であるため、掘削調査は行わなかった。

【構造】

北東一南西方向に延びる。弥生時代以前の無遺物層である3層を掘り込んで構築されている。幅は検出面で約70cm以上、底面幅は約20mである。断面はU字形を呈し、残存深は約50cmである。底面の標高は約4.217~4.252mで、南側に向ってやや標高が低くなっているが、ほぼ平坦である。

【覆土】

覆土は6層にわかれる。

- ①層：黒褐色（2.5YR3/2）シルト質粘土。粘性非常に強。しまり非常に強。
- ②層：暗灰黄色～黒褐色（2.5YR4/2~2.5YR3/2）シルト質粘土。粘性非常に強。しまり非常に強。

鉄分の沈着した粗粒砂を層下部に2割程度含む。

- ③層：黄灰色（2.5YR4/1）シルト質粘土。粘性非常に強。しまり強。有機物粒子を1割程度含む。
- ④層：暗灰黄色（2.5YR4/2）シルト質粘土。粘性非常に強。しまり強。有機物粒子を4割程度含む。
- ⑤層：灰色（5Y4/1）粘質シルト土。粘性強。しまり強。1mm大の灰色（N5/）ブロックを1割程度含む。
- ⑥層：灰色（5Y4/1）粘質シルト土。⑤層と類似するが、層下部に灰白色（N7/）粘土ブロックを3割程度含む。

【遺物】

遺物は出土しなかった。

【年代】

遺物が出土しなかったため、年代は不明である。

(5) 挖削跡（図6、図9、図10～図13、カラー写真8、カラー写真9、写真7、写真8）

【調査】

1a区～3b区で客土除去後に検出した。完掘した。

【構造】

1a区：調査区中央部が掘削される。北西隅が立ち上がる。北西部の落ち込んだ下場に石列が構築される。また、南東隅でも立ち上がるが、立ち上がり部に畦畔状遺構が構築される。掘削跡床面標高は約4.19mで、立ち上がり部との比高差は約32cmである。

1b区：調査区前面が掘削されるが、南東隅で立ち上がる。掘削跡床面標高は約4.31mで、立ち上がり部との比高差は約26cmである。

2a区：調査区北部が掘削される。掘削跡床面標高は約4.24mで、立ち上がり部との比高差は約45cmである。

2b区：調査区北部が掘削される。調査区西部～中央部では掘削跡床面標高は約4.26mで、立ち上がり部との比高差は約32cmである。調査区北東部では鉤手状に屈曲し、さらに一段低くなる。北東部掘削跡床面標高は約3.98mで、西側～中央部掘削跡床面との比高差は約26cmである。段差のある水田（棚田）様となっていたものとみられる。

3a区：調査区北部が掘削される。掘削跡床面標高は約4.18mで、立ち上がり部との比高差は約56cmである。

3b区：調査区北部が掘削される。掘削跡床面標高は約4.16mで、立ち上がり部との比高差は約61cmである。なお、床面に6点の木杭が打設されている。

【性格】

掘削跡に堆積したIV層は水田床土、III層は水田耕作土であると考えられるので、水田を造成するために、行われたものと考えられる。

【年代】

掘削跡に堆積したIV層およびIII層の最新遺物は、江戸時代後期（19世紀中葉）の磁器であるため、掘削が行われたのもこれに近い年代であると考えられる。

(6) 石列遺構 (図6, 図7, カラー写真10, カラー写真11, 写真9~写真18)

【調査】

1a区で、3層(Ⅱ層)除去後に検出した。

【構造】

1a区北西部の掘削跡に沿って、下場に構築される。長さ50cm程度の砾を10個程度北東一南西方向に配する。1a区8層(Ⅵ層)または8層直上に構築される。掘り込みなどは確認されないため、元来、地上に露出していたものと考えられる。南側の面を意識して配列される。北側は根がため石が何箇所かで確認される。石には楔状の工具による痕跡が数箇所で認められ、石の上面や側面だけでなく下面にも認められることから石列設置時には既に施されていたものと判断される(写真11~写真18)。そのため、石割の際の楔による矢穴であると考えられる。矢穴の幅は約4.5cmで1寸5分に相当する。

【性格】

水田を造成するための掘削跡に沿って、構築され、水田床土や水田耕作土が石列の外側に堆積するため、水田を区画したり、畦道を補強するものである可能性がある。

【年代】

周辺土層堆積状況から、水田を造成するための掘削後、ほどなく構築されたものとみられる。そのため掘削が行われた江戸時代後期に近い年代が想定される。矢穴の幅が尺貫法に則っていることもこの想定を補強する。

(4) 畦畔状遺構 (図8, 図9, カラー写真10, カラー写真12, 写真19~写真26)

【調査】

1a区および1b区で、1層(Ⅰ層)除去後に、確認した。

【構造】

1a区南東と1b区北西で確認。幅約40cmで、高さ約40cm。北東一南西方向に弧状に配される。1区8層(Ⅵ層)上に構築される。北側は緩慢に立ち上がるが、南側は急激に立ち上がる。構築される箇所は8層が高く掘り残されており、その上に大きく2段階の工程で土が積まれている。木杭が打たれ、土が積まれた後、樹皮付きの木を横に渡す。その後、更に土を積み表面に藁を敷くという構造である。この畦畔状遺構の両側には4層(Ⅲ層)が堆積するが、この畦畔状遺構周辺では4層の上面にも藁が確認される。また、その後畦畔状遺構の両側には3層(Ⅱ層)が堆積する。

【性格】

水田を区画する畦畔であるものと考えられる。

【年代】

水田に伴って構築されたものであると考えられるので、水田の年代である江戸時代後期の所産であると考えられる。

(5) 木杭列1 (図13, 写真27)

【調査】

3b区の5層(Ⅳ層)中で杭頭を確認した。木杭は現地で保存した。

【構造】

3 b 区掘削跡底面に 6 点の木杭が打ち込まれている。7 層（VI 層）に打ち込まれている。それぞれの木杭の間隔は約 40~110cm である。

【性格】

水田に伴う構築物であると考えられる。

【年代】

水田の年代である江戸時代後期頃のものと考えられる。

(5) 木杭列 2 (図17, 写真28)

【調査】

5 b 区の客土・1 層（I 層）中で杭頭を確認した。木杭は現地で保存した。

【構造】

3 点の木杭が発見されている。約 80cm の間隔で設けられた 2 点は 7 層（VI 層）に打ち込まれている。1 点は 5 层（III 層）中から、外れた状態で出土した。それぞれの木杭の間隔は約 40~110cm である。

【性格】

水田に伴う構築物であると考えられる。

【年代】

水田の年代である江戸時代後期頃のものと考えられる。

4. 出土遺物

(1) 陶磁器 (図18~図20)

・ 4 a 区 3 号溝出土遺物

1 は土瓶である。口径 10.0cm である。注口部の上部に縫方向に穿孔される耳が付くが、本来 2 個存在したものと推定される胴下部には支えとなる突起が付く。外面は口縁部から胴中部まで灰オリーブ色 (5Y4/2) ~ 明赤褐色 (2.5YR5/6) の釉が掛けられ、胴中部以下は露胎である。内面は胴上部にみに施釉がみられ、口縁部と胴下部は露胎である。注口部内面は一個の穿孔がみられる。なお、口縁部片は 3 b 区 1 層で出土した口縁部片と接合した。19世紀代の所産である。2 は底部片である。外面は露胎で、内面は褐色 (10YR4/4) の釉がみられる。

・ IV 層（近世水田床土）出土遺物

<1 b 区 6 層>

3 は陶器製擂鉢底部である。底径は 5.7cm である。輪轆成形で、擂目は櫛描きである。底部は回転糸切りである。17世紀の所産であるとみられる。

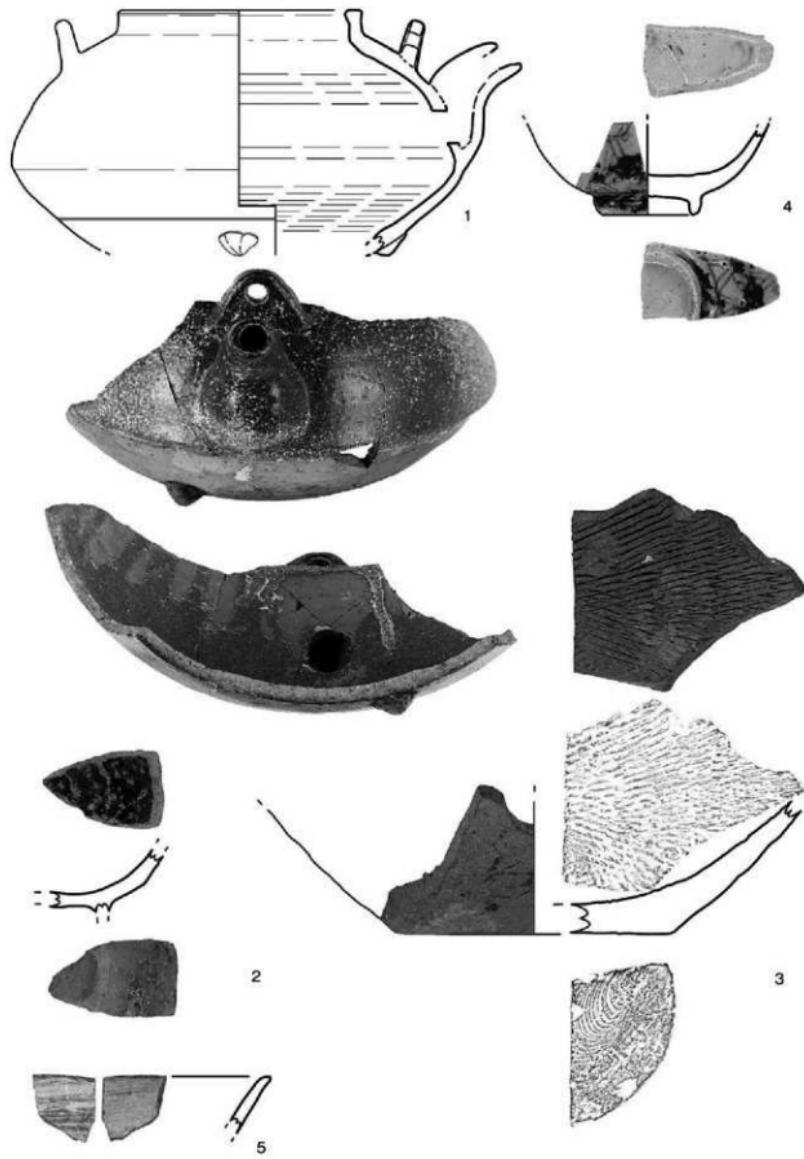


図18 出土陶磁器(1)

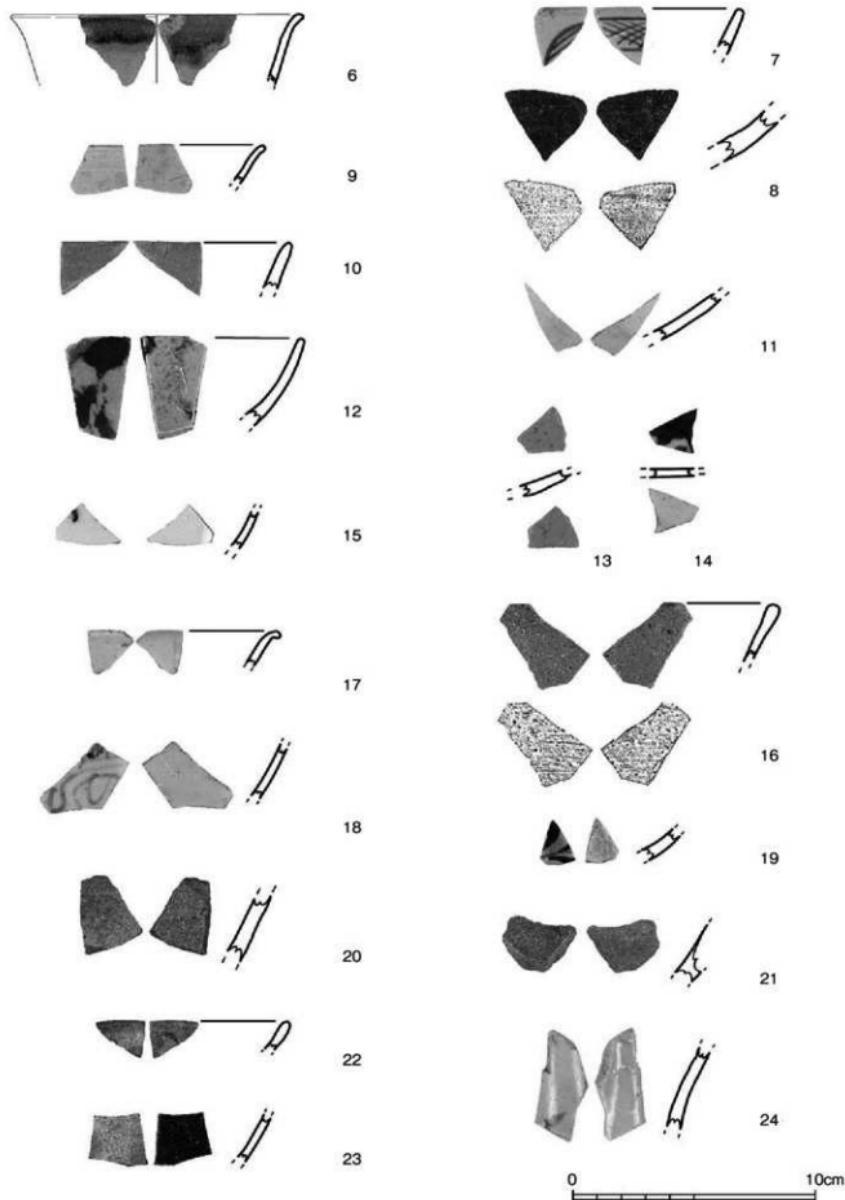


図19 出土陶磁器(2)

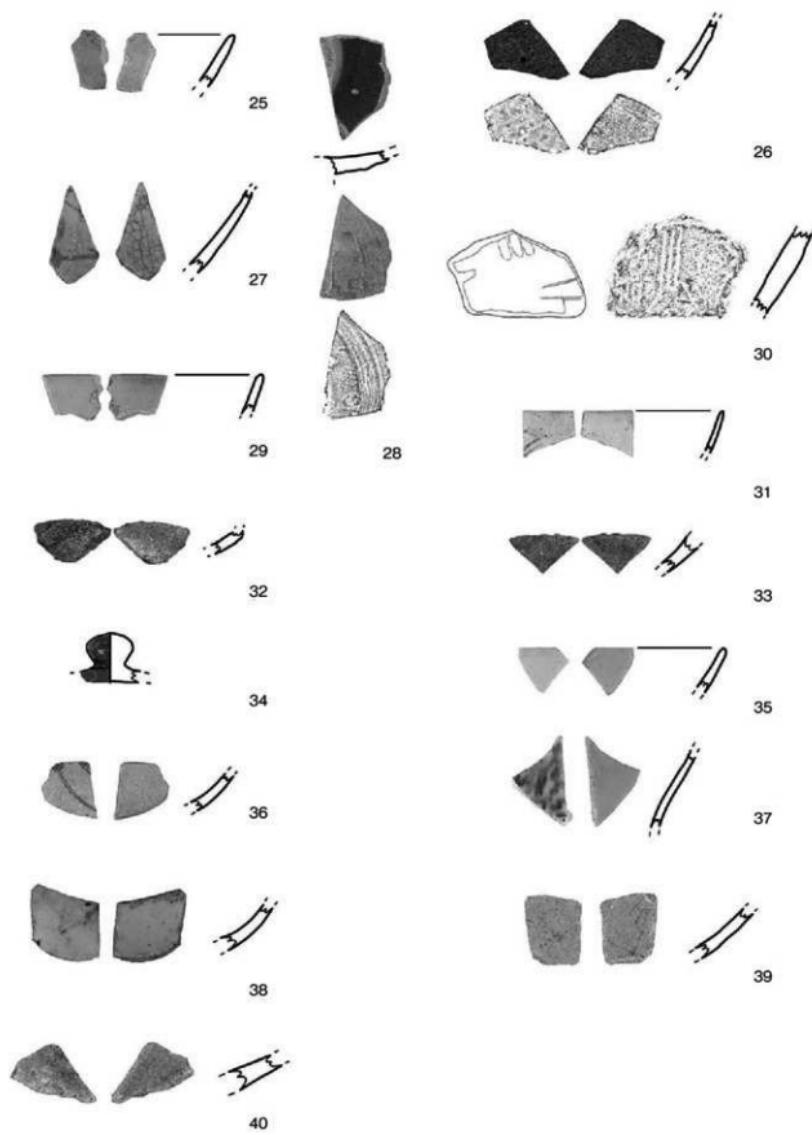


図20 出土陶磁器(3)

・Ⅲ層（近世水田耕作土）出土遺物

<1a区4層>

4は肥前系染付丸形碗底部である。高台径は4.2cmである。二重網目文が描かれる。18~19世紀の波佐見系磁器であるとみられる。鉄分が多く付着している。

<1a区3層>

5は朝鮮時代粉青砂器碗口縁部である。刷毛目（귀얄）技法で装飾され、15世紀後半~16世紀の所産であるものと考えられる。

<2a区3層>

6は磁器碗口縁部である。口径は12.0cmである。口縁部上部は内外面ともにぶい黄色（2.5YR6/3）と赤色を呈する。

<2b区3層>

7は肥前系染付碗口縁部である。外面には丸文が描かれる。19世紀中葉の波佐見系磁器であるとみられる。8は近世陶器片である。内外面に部分的に釉がかかる。

<3a区4層>

9は白磁碗口縁部である。10は朝鮮時代青磁碗口縁部である。11は白磁胴部片である。

<3b区4層>

12は肥前系染付碗口縁部である。埋没後の作用により多量に鉄分が付着する。

・Ⅱ層（近世包含層）出土遺物

<1a区3層>

13は白磁胴部片である。14は染付底部片で、内面に施文がみられる。

<2a区2層>

15は染付胴部片である。16は朝鮮時代青磁碗口縁部片である。

<3b区2層>

17は白磁口縁部である。18は明青花胴部片である。外面には草文が描かれる。19は染付胴部片で、内面は露胎である。20は朝鮮時代青磁胴部片である。21は雜釉陶器胴部片である。21は碗口縁部であるが、内面に鉄絵がみられる。風化が甚だしく、釉薬が剥げたようにもみえ、鉄絵青磁である可能性もある。23は施釉陶器胴部片である。24は染付胴部片である。

・Ⅰ層（近世包含層）出土遺物

<1b区1層>

25は白磁碗口縁部である。26は施釉陶器胴部片である。27は肥前系染付胴部片である。

<2a区1層>

28は内面に灰色（10Y4/1）の顔料で装飾される底部片である。内外面に目跡が残る。

<2b区1層>

29は白磁碗口縁部である。

<3a区1層>

30は瓦質描鉢である。間隔をおいて櫛描きによる描目が入る。16世紀以前の所産であるとみられる。31は肥前系染付碗口縁部である。32は施釉陶器胴部片である。

<3 b 区1層>

33は朝鮮時代青磁胴部片である。34は蓋のつまみ部である。暗青灰色（5BG3/1）の釉が施される。土瓶の蓋であるものとみられるが、3 b 区1層で出土した土瓶口縁部が4 a 区3号溝覆土で出土した土瓶と接合したことから、本来、この土瓶に伴う蓋であった可能性がある。

<5 a 区1層>

35は白磁碗口縁部片である。36は肥前系染付胴部片である。

・表土出土遺物

<1区表土>

37は明青花胴部片である。

<調査区表面採集>

38は肥前系染付胴部片である。39は白磁胴部片である。16世紀頃の朝鮮時代白磁の可能性がある。40は白磁胴部片である。

(2) 土器 (図21, 表3)

近世土層から弥生土器などの土器片が出土しているのでここで報告する。いずれも小片で、磨耗が甚だしい。

41は陶質の土器である。外面に自然釉がわずかにみられる。小片のため判断が難しいが、韓半島三国時代の陶質土器である可能性もある。42は弥生土器底部片で、外面に黒斑がみられる。43は弥生土器壺頸部片である。44は弥生時代中期壺底部片である。45は弥生土器底部片である。46は酸化焰焼成土器の口縁部である。中世土師器であるとみられる。47は須玖Ⅱ式壺口縁部である。48は弥生土器底部片である。

(3) 石器

近世土層から弥生時代を中心とする時期の石器が出土しているのでここで報告する。

【剥片石器】(図22, 表4)

49は黒曜石剝片である。原礫面が多く残る。50は凹基式黒曜石製石鎌である。51は黒曜石剝片である。角ばった原礫面がみられる。52は黒曜石剝片である。原礫面を残す。剝離面の風化は甚だしく、一部二重バティナがみられる。53は黒曜石剝片である。丸みを帯びた原礫面を残す。剝離面の風化は甚だしく、二重バティナがみられる。54は平基式黒曜石剝片である。丸みを帯びた原礫面を残す。55は黒曜石製石鎌である。

【砾石器】(図23, 表4)

56は玄武岩製凹石である。57は砂岩製凹石である。58は玄武岩製磨石である。

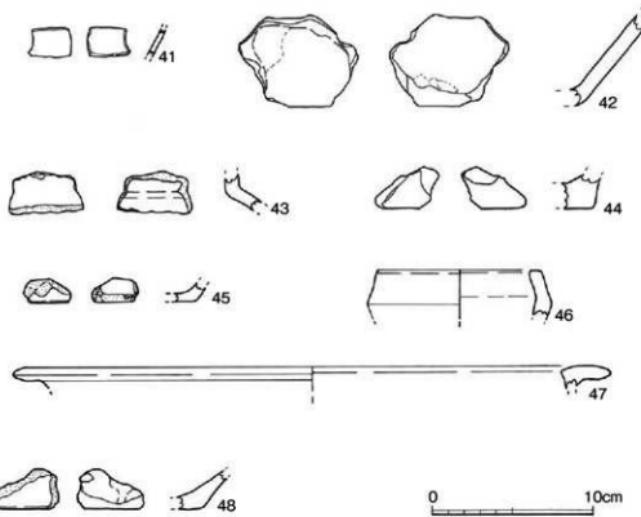


図21 出土土器

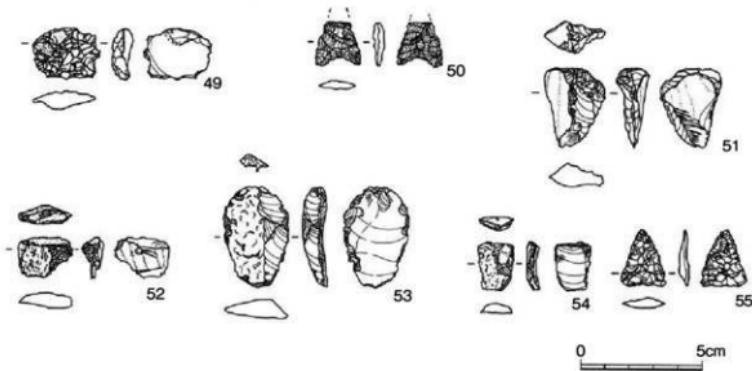
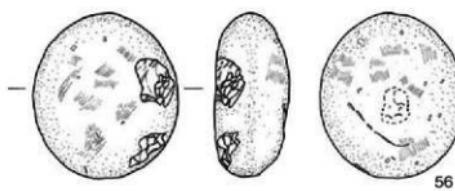
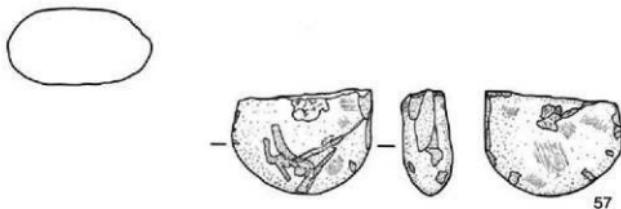


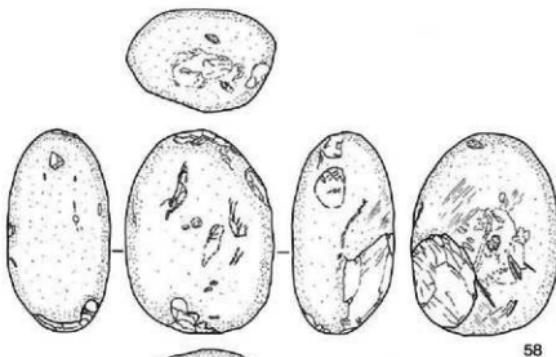
図22 出土石器(1)



56



57



58

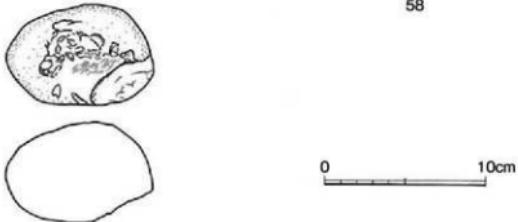


図23 出土石器(2)

表3 土器観察表

報告 番号	調査区	層位	時期・ 型式	器種	部位	L1径(cm)	色調(外面)		色調(内面)		粘土	調整(外面)	調整(内面)
							色	Hue	色	Hue			
41	1 a 区	4 層	陶質土器?	鋸部			灰オーリーブ	SY6-2	灰灰	2.5Y5-1	長石	同軸ナメ	同軸ナメ
42	1 b 区	4 層	陶牛土器?	底脚附近			灰白	2.5Y8-2	灰灰	2.5Y7-2	長石・石英	ナメ	ナメ
43	1 b 区	4 層	陶牛土器	蓋	底脚		灰白	2.5Y7-1	灰白	2.5Y7-1	長石	ナメ	ナメ
44	2 a 区	3 層	弦生土器	裏	底脚		桂	7.5YR6-6	明褐	7.5YR5-6	長石・石英	焼瓦	焼瓦
45	2 a 区	2 层	弦生土器	底脚			桂	SYR6-4	にあい褐	7.5YR6-4	長石	焼瓦	焼瓦
46	2 b 区	2 层		L1脚部		10.0	灰褐	7.5YR4-2	にあい褐	7.5YR5-4	長石・石英・黒鐵・角閃石	ナメ	ナメ
47	3 a 区	4 层	環状三式	裏	L脚部	36.6	灰白	7.5YR8-2	にあい褐	7.5YR7-3	石英・長石・金雲母	焼瓦	焼瓦
48	4 b 区	弦生土器	底脚				桂	2.5YR6-6	暗灰黄	2.5Y5-2	長石・石英	焼瓦	焼瓦

表4 石器観察表

番号	調査区	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
49	1 a 区	3 層	刮片	黑曜石	2.1	2.8	0.9	4.17
50	1 b 区	1 層	石鏨	黑曜石	残存1.85	1.85	0.5	残存1.15
51	1 b 区	1 层	刮片	黑曜石	3.2	2.5	1.3	6.07
52	2 b 区	1 层	刮片	黑曜石	1.7	2.2	0.8	2.09
53	3 b 区	2 层	刮片	黑曜石	4.2	2.65	1	8.49
54	3 区	表土	刮片	黑曜石	2	1.5	0.5	1.47
55	5 a 区	表土	石鏨	黑曜石	2.3	1.85	0.4	1.18
56	1 b 区	1 层	凹石	玄武岩	10.1	8.9	4.6	696.5
57	1 b 区	6 层	凹石	砂岩	残存6.5	8.5	3.15	残存268.72
58	3 区	表土	磨石	玄武岩	12.4	9	6.2	995

(4) 金属器(図24)

<2 b 区 2 層>

59は寛永通寶銅一文錢である。厚さ1.00mmである。「寛」字と「通」字が残り、「通」字はマ頭通である。書体の特徴からみて新寛永であるとみられる。一方向からの力が加わって半裁されているが、埋没後の耕作などによりなされた可能性が高い。

(5) 木製品(図25)

<1 b 区 畦畔状遺構>

60は木杭である。長さ31.2cm、幅(直径)4.9cmである。



図24 出土銭

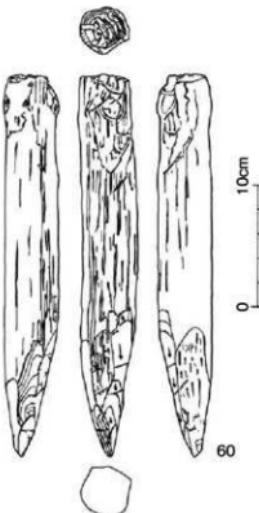


図25 出土木製品

IV. 総括

ここでは総括として今次調査区の時期的変遷について整理する。

(1) 後期旧石器時代～縄文時代

今次調査区の近世包含層（IV層～I層）では、黒曜石剝片が数点出土しているが、バティナの様相から旧石器時代～縄文時代に遡る可能性があるものも含まれているとみられる。特に原縫面を残すものが多く、原縫面の状態は角縫と円縫の二者が認められるが、前者は腰岳産、後者は牛田産であるものとみられ、異なる原産地からの流入が想定される。当該時期に調査区周辺が利用されたものと推定される。

(2) 弥生時代

今次調査区の近世包含層（IV層～I層）から数点の弥生土器片が出土した。その大部分が小片で磨耗が甚だしい。時期が明確なものとしては弥生時代中期後葉の須玖II式壺がみられる。原の辻遺跡の調査では、上層の近世包含層から弥生土器が出土することが多いが、今次調査区では調査面積に比して、その数量は少ない方である。また、明確な弥生時代の遺構も確認できなかった。環濠に接し、調査区西隣の2016年調査地点では古墳時代の溝が検出されるとともに、弥生時代遺物も多数出土しているが（古澤編2018）、今次調査区では土地の利用はそれほど活発ではなかったものと推定される。

(3) 中世

中世の遺物として近世包含層（IV層～I層）から出土した土師器や貿易陶磁が挙げられる。貿易陶磁では明青花や朝鮮時代磁器がみられ、中世後期のものが中心である。特に朝鮮時代磁器の出土が目立ち、粉青沙器などが確認されている。朝鮮時代磁器は壱岐島内の中世遺跡で出土することが多く、また原の辻遺跡でも上層ではしばしば認められる。文献でも認められる壱岐島と朝鮮との交流を裏付ける物証であるといえよう。

(4) 近世

今次調査区では近世に掘削により水田が造成されていた。水田造成とほぼ同時に石列遺構や畦畔状遺構が構築されている。水田床土（IV層）と水田耕作土（III層）での最新遺物は19世紀中葉頃の陶磁器であった。今次の調査では、明治期以降の印判手（型紙刷り・銅版刷り）が出土しなかった。そのため幕末期かそれ以前に一連の工事が行われたようである。水田は2b区でみられたように、段状に設けられた箇所がある。石列遺構は、現在の民俗事例との対比から、水田の境界を示したり、道の補強であったものと考えられる。また3号溝も同様に19世紀頃に構築・利用されていた。調査区西隣には現在、水路が開削されているが、この工事に伴い実施された1994年度調査では2基の石組遺構や溝などが検出されているが（松永1997）、今次の調査成果と併せて考えると、水田に伴う近世の遺構であった可能性が高い。

[引用・参考文献]

古澤義久編2018『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第27集

松永泰彦1997「原の辻遺跡（平成6年度芦辺高原地区）の調査」『原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前

B遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集

2018년도 하루노쓰지 (原の辻) 유적

아시베타카하라(芦辺高原)지구 발굴조사 성과

2018년 11월 1일~12월 28일에 걸쳐, 하루노쓰지유적 북부 저지 주변의 토지 이용을 밝히기 위해 발굴조사를 실시하였다.

이번 발굴조사에서는 시기 미상 구상유구 3 조, 에도(江戸)시대 구상유구 1 조, 수전 조성을 위한 굴착 흔적, 석렬 유구 1기, 논둑 유구 1기가 발견되었다.

출토유물로는 야요이토기, 흑요석, 명대 청화(明代青花), 조선시대 자기, 에도시대 도자기 등이 발견되었다. 출토된 야요이토기는 양이 적고 모두 작은 과편으로, 야요이시대에는 토지 이용이 활발하지 않았다고 생각된다. 무역 도자 중에는 조선시대 자기가 많아 15세기경 이키와 한반도의 활발한 교류를 보여준다.

(翻訳：古澤義久、校閱：金恩瑩)

2018年度原之辻遗址芦边高原地区的考古发掘

2018年11月1日至12月28日，为了弄清土地利用情况，长崎县埋藏文化财中心对原之辻遗址北侧进行了考古发掘。本次发掘共发现年代不明灰沟3条、江户时代灰沟1条、稻作遗存、石列遗存、田埂遗存各1座。出土遗物有弥生陶器、黑曜石制品、明代青花瓷、朝鲜时期瓷器、江户时代陶瓷器等。陶器中弥生时代的数量较少，而且全部为小残片，可能与此地当时频繁耕作有关。贸易瓷器中朝鲜时期的数量较多，是15世纪壹岐与朝鲜半岛文化交流活跃的实物见证。

(翻訳：王達來)



写真1 2a区1号溝検出状況

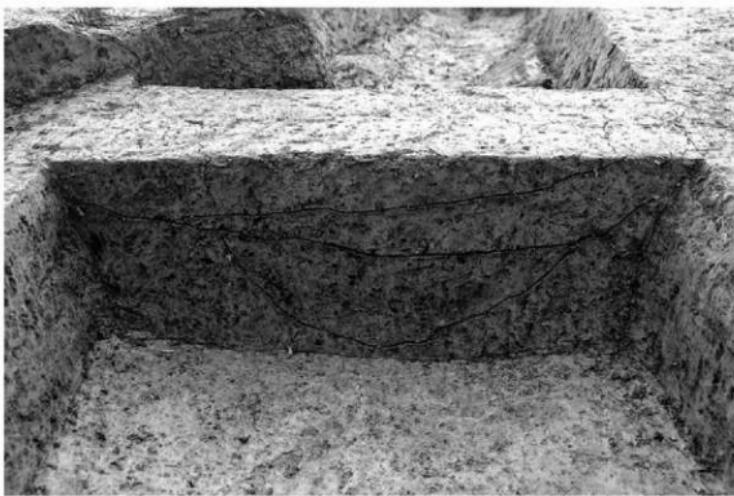


写真2 1a区1号溝断面（1）



写真3 1a区1号溝断面（2）



写真4 2b区2号溝検出状況

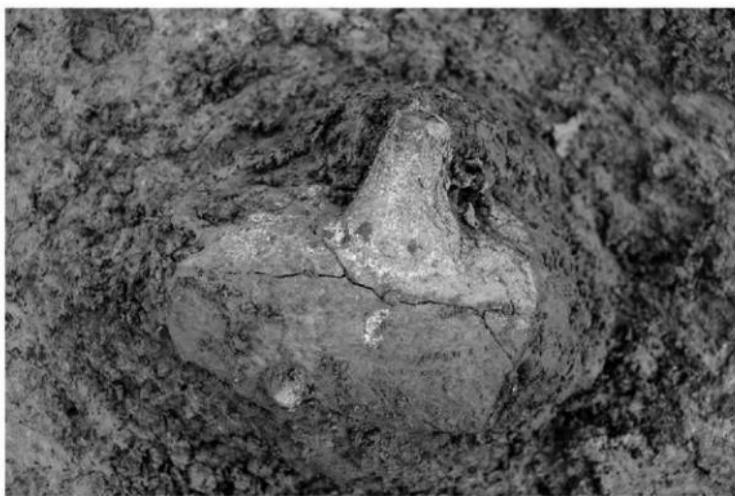


写真5 4a区3号溝遺物出土状況



写真6 4b区4号溝



写真7 2b区掘削跡



写真8 3区掘削跡



写真9 1a区石列遺構（北西から）



写真10 1a区石列遺構（南西から）



写真11 1a区石列遺構矢穴（1）



写真12 1a区石列遺構矢穴（1）細部



写真13 1a区石列遺構矢穴（2）

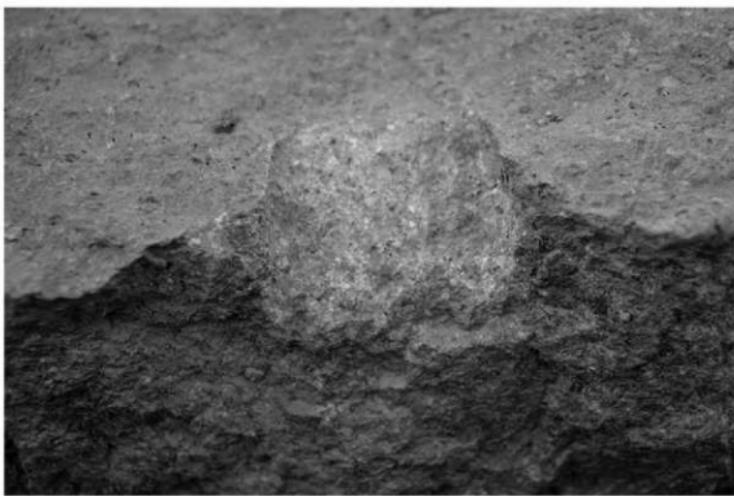


写真14 1a区石列遺構矢穴（2）細部



写真15 1a区石列遺構矢穴（3）



写真16 1a区石列遺構矢穴（3）細部



写真17 1a区石列遺構矢穴（4）



写真18 1a区石列遺構矢穴（4）細部



写真19 1a区・1b区畦畔状遺構（南西から）

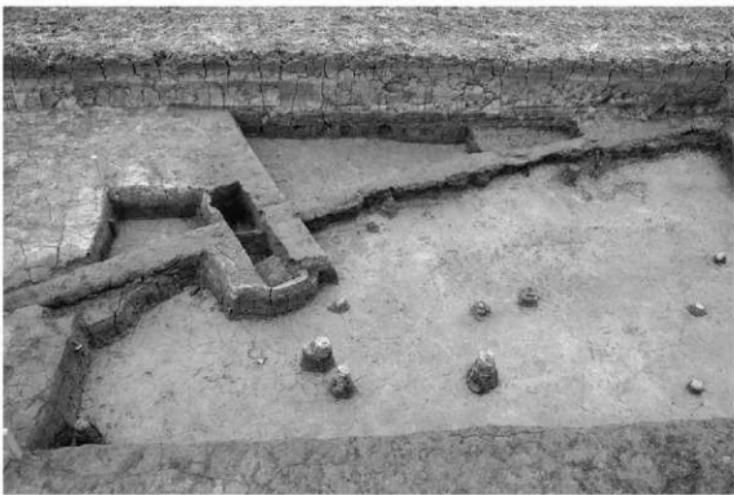


写真20 1b区畦畔状遺構（南から）



写真21 1b 区畦畔状造構断面

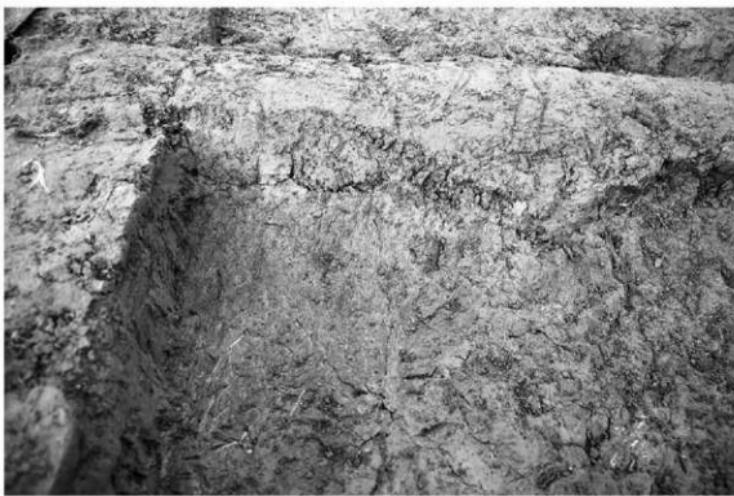


写真22 1b 区畦畔状造構蓋敷設状況



写真23 1b 区畦畔状遺構箇敷設状況細部



写真24 1b 区畦畔状遺構木杭打設状況（1）



写真25 1b 区畦畔状造構木杭打設状況（2）



写真26 1b 区畦畔状造構木杭打設状況（3）



写真27 3b区木杭打設状況



写真28 5b区木杭打設状況

原の辻遺跡出土碇石について

I. 緒言

2018年度芦辺高原地区の調査は水田で実施された。発掘調査区のある水田の西側には水路が位置している。この水路部分は1994年に発掘調査が実施されている（山下・川口編1997）。調査区のある水田から水路へ排水溝が開削されているが、発掘調査中にこの排水溝に蓋として利用されていた礎を観察したところ、弥生時代の碇石であることが判明したので、土地耕作者の許可を得て、採集した（図1）。弥生時代の遺物が本来の使用法とは異なる方法で、現代に用いられたという点で、民俗的にも興味深い事例である。

II. 採集資料の概要（図2、図3）

弥生時代の玄武岩製の碇石である。長さ28.4cm、幅24.9cm、厚さ9.4cm、重さ10.6kgである。原礎はある程度、平面形が橢円形を呈するように、丸く加工した後、短軸方向に2箇所、叩打により抉りを設けている。その内、1箇所は、擦れた痕跡が顕著である。表面には、農耕機具などによると思われる傷が多数ついている。

III. 原の辻遺跡の碇石

原の辻遺跡では、碇石と呼ばれる超大型礎石錘が、本資料を含めこれまで17点程度出土している（表1、図4）。時期が限定できる資料は少ないが、川原畑地区1号旧河道土器溜出土例から弥生時代中



図1 2018年度芦辺高原地区碇石発見状況

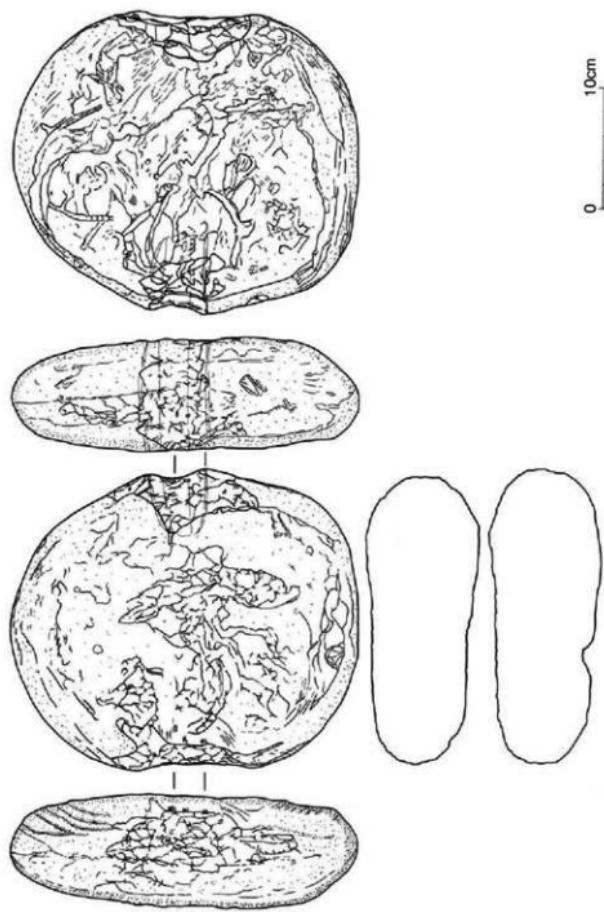
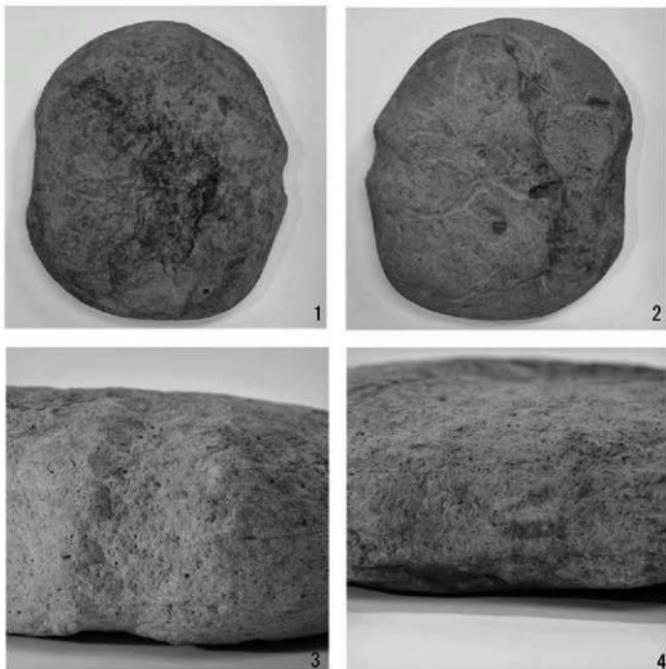


图2 2018年度芦边高原地区采集碗石



1.2平面形態、3.4抉り部

図3 2018年度芦辺高原地区採集碇石写真

期後半～中期末には確実に存在したものと考えられる。また、石田高原地区落ち込み1出土例から弥生時代後期後葉～古墳時代初まで存続したものとみられる。石材は壱岐島内でも確保が容易な玄武岩製が多い。出土地区は川原畠地区、芦辺高原地区、石田高原地区、不條地区といった丘陵北部の低地部に集中する。また、出土遺構は、旧河道、溝、落ち込みなどである。このことから原の辻の集落北側低地を蛇行していた旧轔鉢川で主に利用されていた遺物であることを窺うことができる。

碇石の重さは7.26～18.6kgであり、2倍以上の重量変異がある。重さがわかる資料を順に配列したグラフが図5である。8kgを前後する群、12kgを前後する群、14kgを前後する群、18kgを前後する群があるが、今次調査で発見された資料が10.6kgであったように、今後の調査事例によっては中間の重さを埋める資料が発見される可能性があり、漸移的な重量分布とみる方が実態に即しているかもしれない。緊縛部は短軸両端を打ち欠いて設けられるものが多く、長軸方向に打ち欠かれたものは確認されていない。

石原沙は縄文時代と比較して弥生時代の礎石錘は平面が橢円形または円形を主体とし、全体的に丸みを持たせている点が特徴であるとし、海底の岩礁での根がかりを防水するように変化したと述べて

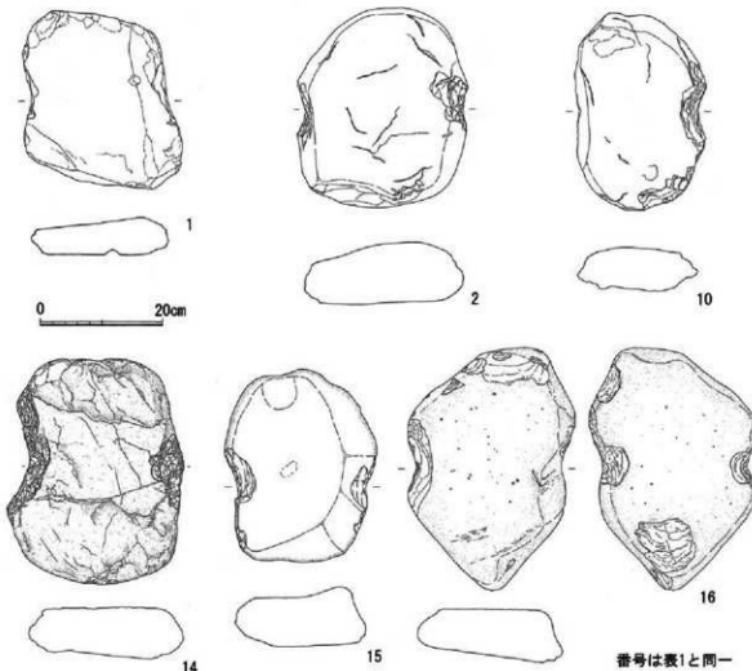


図4 原の辻遺跡出土碇石

表1 原の辻遺跡出土碇石集成

番号	調査年度	地区	遺構	層	時期	石材	重さ(kg)	文献
碇石1	1995	芦辺高原	1号溝	弥生中期中葉～古墳前期	玄武岩	7.26	山下・川口編1997	
碇石2	1994	川原畠	1号旧河道土器溜	VI層	弥生中期末～後期初	玄武岩	14	宮崎編1998
碇石3	1994	川原畠	1号旧河道土器溜	VI層	弥生中期末～後期初		14.5	宮崎編1998
碇石4	1994	川原畠	1号旧河道土器溜	VI層	弥生中期末～後期初		8.1	宮崎編1998
碇石5	1994	川原畠	1号旧河道土器溜	V層	弥生中期後半～中期末		18.6	宮崎編1998
碇石6	1994	川原畠	1号旧河道土器溜	V層	弥生中期後半～中期末		11.7	宮崎編1998
碇石7	1994	川原畠	1号旧河道土器溜	V層	弥生中期後半～中期末		9.3	宮崎編1998
碇石8	1994	川原畠	1号旧河道土器溜	V層	弥生中期後半～中期末		12.3	宮崎編1998
碇石9	1994	川原畠	1号旧河道土器溜	V層	弥生中期後半～中期末		8.6	宮崎編1998
碇石10	1994	芦辺高原	1号旧河道包含層	V層	弥生中期後半～後期初	玄武岩	8.1	宮崎編1998
碇石11	1994	芦辺高原	1号旧河道包含層	V層	弥生中期後半～後期初		8.2	宮崎編1998
碇石12	1994	芦辺高原	1号旧河道包含層	V層	弥生中期後半～後期初		8.6	宮崎編1998
碇石13	1995・96	川原畠	2号旧河道		弥生前期後葉～古墳前期		18.2	宮崎編1998
碇石14	1995・96	川原畠	2号旧河道		弥生前期後葉～古墳前期	玄武岩	14.7	宮崎編1998, 林・古澤2012
碇石15	1995・96	不詳	3号旧河道		弥生前期後葉～中期後葉	玄武岩	11.8	宮崎編1998
碇石16	2007	石田高原	落ち込み1	①層	弥生後期中葉～古墳初期	玄武岩	14.5	川畑編2008
碇石17	2018	芦辺高原	表面採集			玄武岩	10.6	本書

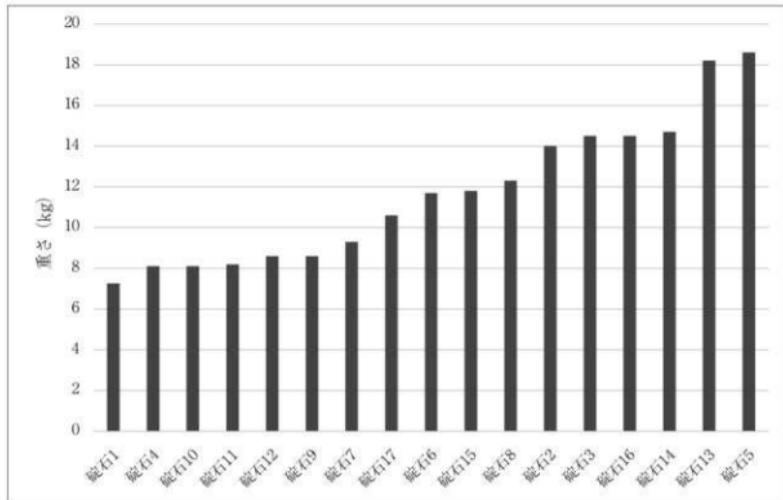


図5 原の辻遺跡出土碇石重量分布

いる（石原2015）。原の辻で出土した碇石もその多くは角が尖ったままでなく、丸みを帯びている点は指摘のとおりである。ただし、平面形としては必ずしも円形や橢円形というわけではなく、抹角方形と呼べるものも存在する。

N. 原の辻遺跡出土打ち欠き石錘

碇石は超大型礫石錘ともされるように、打ち欠き石錘の非常に大きなものとみることもできる。そこで、原の辻遺跡出土打ち欠き石錘の様相について、ここで確認しておきたい。原の辻遺跡では各種の石錘が出土しているが、中尾の分類（中尾2005）によるD類が打ち欠き石錘に該当する。D1類は長軸両端を打ち欠いて緊縛部とするもの、D2類は短軸両端を打ち欠いて緊縛部とするもの、D3類は長軸両端および短軸両端を打ち欠いて緊縛部とするものと分類されている。

これまで、原の辻遺跡で出土した打ち欠き石錘を集めると、17点程度確認される（表2、図6）。石材は玄武岩が多いが、花崗岩や石英もみられる。抉りの位置は短軸方向に2箇所のもの、長軸方向に3箇所のもの、3箇所設けられるもの、短軸方向に片側2箇所計4箇所設けられるもの、短軸両端と長軸両端の4箇所のものなど多様な変異が認められる。碇石がほぼ全て短軸方向に2箇所に抉りが設けられるとの对照的な様相である。

重さは28.65~1,750gであり、60倍以上の変異がある。重さがわかる資料を順に配列したグラフが図7である。1,750gのものは、やや突出した重さを示している。また、28.65gのものも例外的で、石材もほかの打ち欠き石錘とは異なり石英であることから、打ち欠き石錘の中ではやや特殊な資料である。これらを除外するとおおむね100~900gの間で漸移的な重量分布を示すことがわかる。

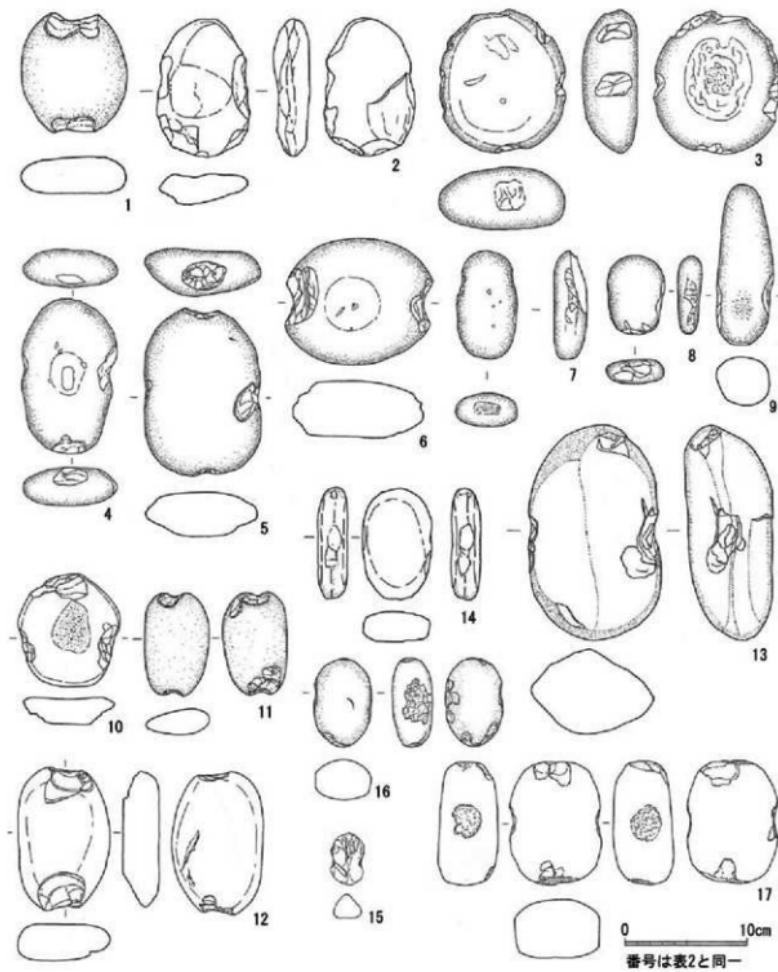


図 6 原の辻遺跡出土打ち欠き石錘

表2 原の辻遺跡出土打ち欠き石錘集成

番号	調査年度	地区	遺構	層	時期	素材	打ち欠き位置	打ち欠き個数	重(g)	文献
打ち欠き石錘1	1998	原				安山岩	長軸	2個	165.56	安室編2000
打ち欠き石錘2	1998	原				安山岩	短軸	2個		安室編2000
打ち欠き石錘3	1999	不特定	B区剖b層			玄武岩	長軸・短軸	4個	700	秒原編2000
打ち欠き石錘4	1999	不特定	1号溝	I層	弥生中期中葉～後期末	玄武岩	短軸	2個	386.1	秒原編2000
打ち欠き石錘5	1999	不特定	B区剖b層			玄武岩	長軸・短軸	4個	720	秒原編2000
打ち欠き石錘6	1999	不特定	2号旧河道	II層	弥生後期～古墳前期	玄武岩	長軸	2個	930.6	秒原編2000
打ち欠き石錘7	1999	不特定	2号旧河道	II層	弥生後期～古墳前期	玄武岩	短軸	4個	161.3	秒原編2000
打ち欠き石錘8	1999	不特定	2号旧河道	II層	弥生後期～古墳前期	玄武岩	短軸	2個	85.58	秒原編2000
打ち欠き石錘9	1999	八反	E区3b層			玄武岩	短軸	2個	354.01	秒原編2000
打ち欠き石錘10	1999	不特定	2号旧河道	II層	弥生後期～古墳前期	玄武岩	短軸	3個	270.44	秒原編2000
打ち欠き石錘11	2002	八反	D区II層			安山岩	長軸	2個	136.64	半尾編2003
打ち欠き石錘12	2004	石田高原	B区5層			花崗岩	長軸	2個	428.38	半尾編2005
打ち欠き石錘13	2008	石田高原	4a層		弥生後期	玄武岩	短軸	2個	1750	川畠編2009
打ち欠き石錘14	2008	原	3層		弥生中期～古墳前期		短軸	4個	210.01	山口編2002
打ち欠き石錘15	2008	高元	遺物包含層			石英	短軸	2個	26.65	田中ほか編2009
打ち欠き石錘16	1998	石田高原	7号溝	弥生中期～後期		短軸		2個		林・古澤2012
打ち欠き石錘17	1998	石田高原	1号溝	弥生中期～古墳前期		短軸		2個	600	林・古澤2012

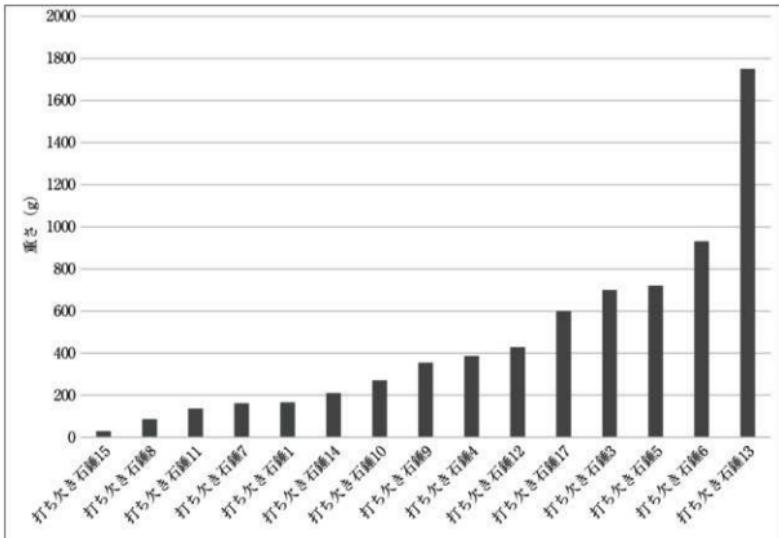


図7 原の辻遺跡出土打ち欠き石錘重量分布

V. 打ち欠き石錘との関係からみた碇石

形態的・技術的には打ち欠き石錘と碇石は類似する。しかし、先述のとおり碇石では短軸方向に2箇所の抉りをもつものにはば限定されるのに対し、打ち欠き石錘では多様な抉りの入れ方がされているという差異もある。もちろん、打ち欠き石錘の中で短軸方向に2箇所の抉りを持つものと碇石の関係を想定することも不可能ではない。

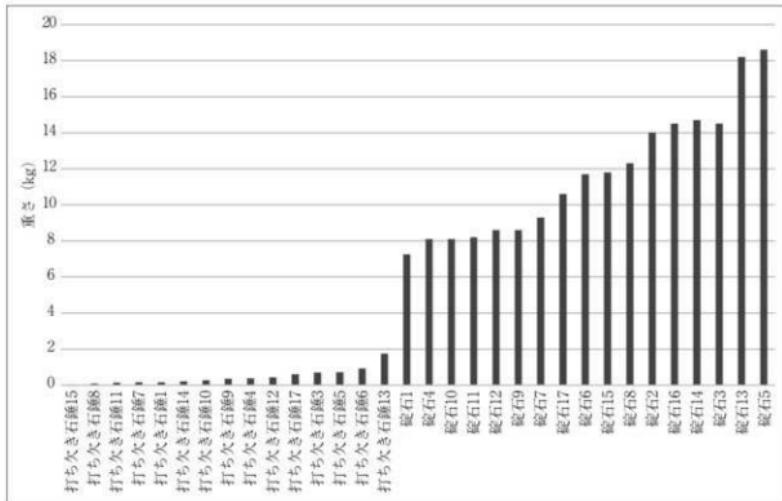


図8 原の辻遺跡出土打ち欠き石錘・碇石重量分布

図5と図7を合成して、重さの分布を一つのグラフとしたものが、図8である。その結果、2~7 kgの間に該当する資料は確認されておらず、漸移的な重量分布を示さない。むしろ打ち欠き石錘とされる資料と碇石とされる資料では、重さの点で隔絶があるということが明らかである。このことは、形態上・技術上類似しているがらも、基本的に両者が違う道具であったということを示唆するのではないだろうか。この両者の差異は、緊縛部(抉り)の大きさからみても、緊縛具の種別(糸・紐・繩)と連関性を持っているものと思われる。

石原渉は大型碇石錘や超大型碇石錘について、民俗例に大型碇石錘が漁撈で用いられる碇として利用されたことなどを基に、あるものはイカリとして、またあるものは漁網の錘として使用され、用途はその時々の目的に従って選別されたもので、多用途に用いられ、丸木舟専用のイカリという繫船具といった個別の特定された用途に使用された専用具ではないと想定している(石原2015)。

しかし、原の辻遺跡に限ってみると、大部分が漁網・釣糸錘として用いられたと推定される打ち欠き石錘と碇石では、重量分布に隔絶があり、同一の用途であるとは認めにくいくらいから、筆者としては碇石の主目的は重量からみて、やはり繫船具としてのイカリであった可能性が高いものとみている。

VI. 結語

本稿では、2018年度採集資料を紹介し、原の辻遺跡出土の碇石について整理した。しかし、碇石の詳細な出土状況からみる用途、時期的な変遷、他地域との関係や系譜など残された課題も少なくない。今後の類例の出土に期待したい。

文献

- 安楽勉編2000『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集
石原涉2015『碇の文化史』思文閣出版
川畠敏則編2008『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第38集
川畠敏則編2009『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第40集
杉原敦史編2000『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
中尾篤志2005「漁撈具」「原の辻遺跡 総集編Ⅰ」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
中尾篤志編2003『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集
中尾篤志編2005『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集
田中聰一・松見裕二・山口優編2009『特別史跡 原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第14集
林隆広・古澤義久2012『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第6集
宮崎貴夫編1998『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
山口優編2002『原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第13集
山下英明・川口洋平編1997『原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集

原の辻遺跡の花粉分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

長崎県壱岐市に所在する原の辻遺跡は、弥生時代の環濠集落を中心とした遺跡である。この遺跡において、古環境に関する手掛かりを得るために、花粉分析用の試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、考察を行った。

2. 試料と方法

分析試料は、芦辺高原から採取された2点（試料No. 1、No. 2）である（表1）。これらの試料から、次の手順で花粉化石を抽出した。

試料（湿重量約3～4g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトトリス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。No. 1についてはプレパラート全

面を検鏡し、No. 2について
は樹木花粉が200を超えるま
で検鏡し、その間に現れる草
本花粉・胞子を全て数えた。
また、単体標本（PLC. 2745
～2752）を作製し、写真を図
版1に載せた。

3. 結果

検鏡の結果、No. 1の試料には花粉化石が含まれていなかつた。No. 2の試料から検出された花粉の分類群数は樹木花粉13、草本花粉17の、形態分類のシダ胞子2の総計32である。これらの花粉の一覧表を表2に、花粉ダイアグラムを図1に示した。花粉ダイアグラムにおいて、樹木花粉

表1 分析試料一覧

試料No.	調査区	出土位置
No. 1	芦辺高原	I a 区8層
No. 2		I a 区4層

表2 産出花粉胞子一覧表

学名	和名	No. 1	No. 2
樹木			
<i>Podocarpus</i>	マキ属	-	2
<i>Tsuga</i>	ツガ属	-	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属規律管束亞属	-	150
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	マツ属規律管束亞属	-	1
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	-	45
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	2
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亞属	-	4
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亞属	-	9
<i>Castanopsis</i> <i>Pusana</i>	シイノキ属-マテバシイ属	-	6
<i>Ulmus</i> <i>Zelkora</i>	ニンジン-ケヤキ属	-	2
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	-	1
<i>Ligustrum</i>	イボタノキ属	-	1
草本			
<i>Typha</i>	ガマ属	-	2
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	-	1
Gramineae	イネ科	-	184
Cyperaceae	カヤツリグサ科	-	4
Monochoria	ミズタマオ属	-	2
<i>Rumex</i>	ギンギク属	-	2
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> <i>Echinocaulon</i>	サナクチデ館-ウナギツカミ節	-	2
<i>Fagopyrum</i>	ゾバ属	-	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	-	7
Ranunculaceae	キンポウゲ科	-	14
Brassicaceae	アブラナ科	-	15
<i>Geranium</i>	フウロウ属	-	1
<i>Rotula</i>	キカラグサ属	-	1
Labiateae	シソ科	-	1
<i>Justicia</i>	キツツノマゴ属	-	2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	-	9
<i>Tubuliflorae</i>	キク属	-	4
シダ植物			
monolete type spore	單孔胞子	-	5
trilete type spore	三条胞子	-	8
Arboreal pollen	樹木花粉	-	225
Nonarboreal pollen	草本花粉	-	259
Spores	シダ植物胞子	-	13
Total Pollen & Spores	花粉・胞子总数	-	490
Unknown pollen	不明花粉	-	3

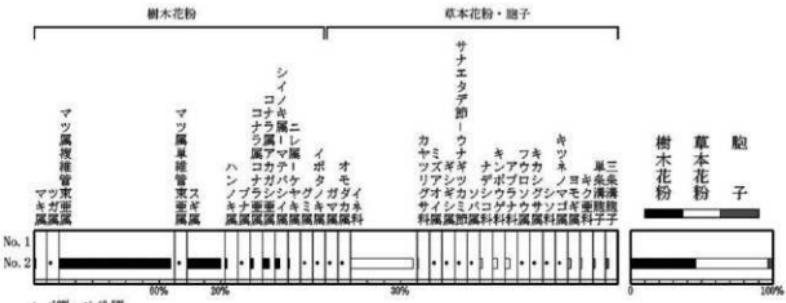


図1 原の辻遺跡における花粉分布図
樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基準として百分率で算出した。

の産出率は樹木花粉総数を基準とし、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基準とした百分率で示してある。図および表においてハイフン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

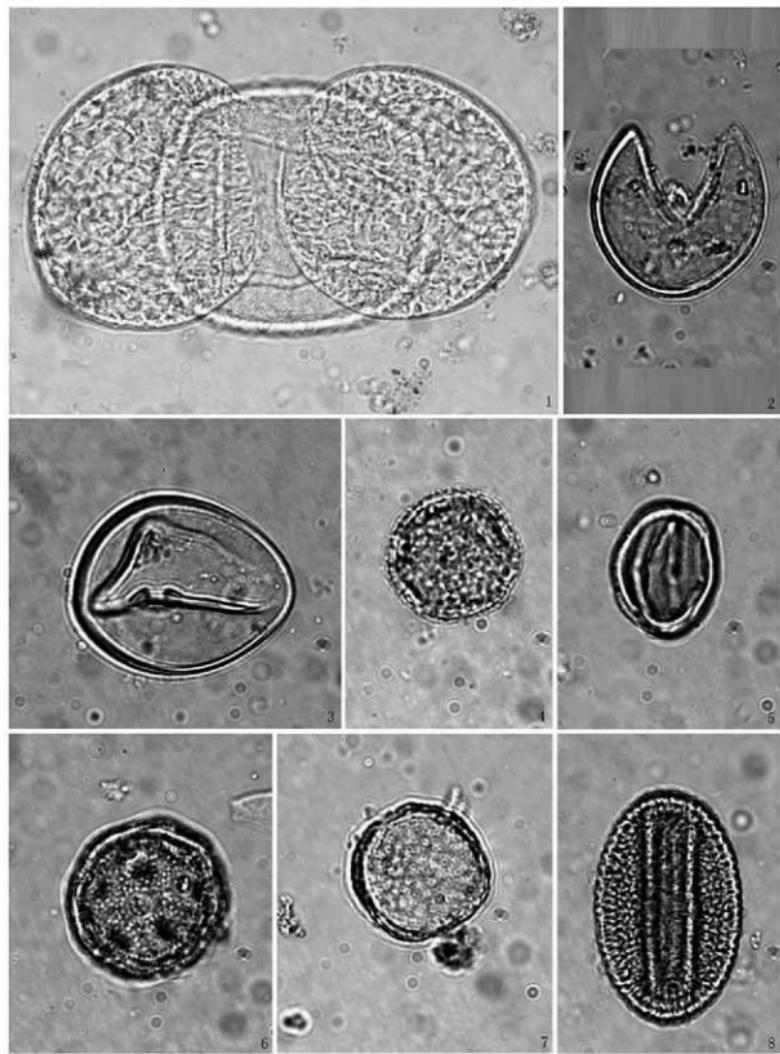
No. 2 の試料について、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属が多産しており、次いでスギ属の産出が目立つ。草本花粉では、イネ科の産出が目立ち、37%の産出率を示す。

4. 考察

No. 1 の試料には花粉化石が含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると、紫外線や土壤バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。No. 1 は好気的環境に晒された可能性がある。あるいは、堆積速度が速くて花粉が取込まれなかつた状況も考えられるが、いずれにしろ、No. 1 の試料から古植生について言及できない。以下では、十分な量の花粉化石が得られた No. 2 の試料から、遺跡周辺の古植生を検討した。

No. 2 では、樹木花粉においてマツ属複維管束亜属の産出が目立ち、コナラ属コナラ亜属を伴っている。マツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属は二次林要素の分類群として知られているため、遺跡周辺の開けた明るい場所にはニヨウマツ類やコナラからなる二次林が分布を広げていた可能性がある。マツ属複維管束亜属に次いで産出が多いのがスギ属であり、遺跡周辺にはスギ林も分布を広げていたと思われる。さらには、シイノキ属 - マテバシイ属やコナラ属アカガシ亜属といった照葉樹林要素の分類群が産出しているため、カシ類やシイ類からなる照葉樹林も分布を広げていたと考えられる。

草本花粉では、イネ科をはじめとし、ナデシコ科やキンポウゲ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科などが産出しており、こうした草本類が芦辺高原周辺に分布していたと思われる。また、ガマ属やオモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属といった好湿性植物の産出も見られ、芦辺高原周辺にこれらの分類群が生育できるような湿地の環境が存在していた可能性がある。このうち、オモダカ属とミズアオイ属、キカシグサ属は水田雜草を含む分類群としても知られており、イネ科の高率な産出と合わせて考えると、周辺に水田が存在していた可能性がある。さらには、ソバ属花粉の産出も見られ、ソバ栽培が行われていた可能性を示唆する。



図版I 芦辺高原 (No. 2) から産出した花粉化石

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 1. マツ属複維管束亞属 (PLC. 2745) | 2. スギ属 (PLC. 2746) |
| 3. イネ科 (PLC. 2747) | 4. オモダカ属 (PLC. 2748) |
| 5. キカシグサ属 (PLC. 2749) | 6. ナデシコ科 (PLC. 2750) |
| 7. キンボウグ科 (PLC. 2751) | 8. ソバ属 (PLC. 2752) |

0.02mm

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき						
書名	原の辻遺跡						
副書名	原の辻遺跡調査研究事業調査報告書						
卷次							
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第35集						
編著者名	古澤義久(編)・長岡康孝						
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴龟触515番地1 電話(0920(45)4080						
発行年月日	西暦2020年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ***	調査期間	調査面積	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐市 芦辺町深江平触	42424	72-92	33°45'30" 129°45'55"	2018 11. 1 ~ 2018 12. 28	500m ²	原の辻遺跡調査研究事業 (国庫補助事業)
取録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原の辻遺跡 (芦辺高原地区)	集落	弥生時代	溝・掘削跡・石列遺構・畦畔状遺構・木杭列	弥生土器・石器・近世陶磁器			

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第35集

原の辻遺跡

2020（令和2）年3月31日

発行 長崎県教育委員会
長崎市尾上町3番1号

印刷 株式会社 昭和堂